









特63

791



智  
笑  
談



はしがき

朝の紅顔夕の白骨、兎角浮世の相場は、何千年の昔しから、  
 版木に摺つた摩訶般若心經、讀むと讀まぬも勝手なれど、  
 智辛い浮世に流轉して、貸した借りぬの訴訟沙汰も、烟塵の  
 應では理屈は無益、花見の返りに美人を見て、飛んだ苦勞を  
 爲したからとて、極樂へ何の土産になるものか、元日が冥途  
 の旅の一里塚なれば、柱時計は命を刻む正宗の名刀、夢の間  
 に月日が經つて、臨終際に慌てたからとて、六日の菖蒲十日

44. 3. 24

自序



目 次

一 休の幼年及び其人と爲り……………一

智囊小僧過失の遁辭……………七

頓智小僧師僧を驚かす……………一〇

大人小供の智慧競争……………一五

沙門鯉魚腹葬の引導……………二三

一休山伏法力の競争……………二九

取換へ引換へ百萬遍敷盛の舞ひ……………三三

の菊、誰れも相手にせぬが、娑姿の習ひ、一休和尚は全體醉狂の人でなく、活きた佛で日本の釋迦なり、時には烏を黒いと言ひ張り、それかと云ふて念佛無用と早合點は禁物なり、三界の火宅に胡亂つき廻る連中は、一番和尚の鐵槌を受けて見られよ、柳は緑花は紅の眞味も知れるべし、敢て本書を大方に推奨し奉ると云爾。

著者しるす



一 休風の神と爲る……………四一

一 休の慈眼猿猴を感動す……………四三

一 休極大宇宙の笠を被る……………四五

一 休の輕口咄嗟の容辭……………四九

徹治毒療の狂歌……………五一

上より上に下れる難問……………五六

一 休別號の命名の所以……………五九

蜷川新左衛門の參禪……………六二

蜷川新左衛門大風雨の見舞……………六九

蜷川新左衛門笥の手打……………七三

蜷川新左衛門の角池を一休丸く見る……………七六

蜷川一休念佛奇談……………七九

蜷川一休五戒問答……………八二

蜷川新左衛門の臨終一休の引導……………八七

難問の返報……………九三

一 休活論理推測……………九五

赤飯手形の通行……………一〇〇

濁酒和歌の問答……………一〇三



化物は飄々の間に在り……………一〇四

一休禪師弟子を教ふるの妙道……………一〇七

釋迦達摩の故郷に一休禮拜す……………一一〇

一休の變化天淵月籠の相違……………一一三

一休秘密の玉手箱を開く……………一二八

觀面の教誨……………一三四

一休の妙讚他僧を驚かす……………一三六

虎の威を假る狐の智慧……………一三〇

幽靈問答一休三寸舌頭に釋迦を弄す……………一三三

四百四病外貧病の治療……………一三八

正月元日一休髑髏の年賀……………一四三

一休破戒の頓智……………一四九

一休の頓才五百羅漢の名を言當つ……………一五四

見猿聞猿言猿の三猿奇談……………一五九

金剛の正體一發の放屁の如し……………一七三

堪忍の方法……………一七六

一休の洒落長大文字の揮毫……………一八二

成佛問答遁世者の閉口……………一八六



一 休地獄問答歌合……………二八

一 休の酒興浮れ遊び……………一九一

一 休公然の偽言衆人の疑惑を覺す……………一九七

一 休嘘八百の寓意……………二〇二

瓢箪顛倒の手品……………二〇六

一 休の色情仇し女房の袖引き……………二〇九

一 休男色に心を動かす……………二一七

竹林寺住僧の戀病……………二一九

一 休の頓才艶書の讀變へ……………二二三

一 休佛法に戀慕す……………二三〇

一 休の破戒哲理問答……………二三八

一 休の判断神通の推測……………二四四

一 休の放屁論面白の春べや……………二五三

一 休終身の一大失敗……………二五五

一 休の豫言并に永眠……………二六六





一休 狂 智 笑 話

鐵山禪師著

一休の幼年及び其人と爲り

(1) 談笑智頓休一

爰こゝに一休きゅう禪師ぜんじと申まをしまするは固ちと後ご小松院まつかみんの二ふたの宮みやにてましまする最いと  
 尊たふとき身の出家しゆつせされしものでござります、其諱そのみなは宗純そうじゆんと申まをされ一休きゅうと云いへる  
 は其號そのがうでござります所謂いはゆる梅檀めいたんは二葉ふたはより莠ひんはしとかにて幼いとけなき時ときより最いとも賢かしこ  
 くましくして此頃このころより灰ほの見みえましたる才智さいちの光輝ひかりは早はやく既すでに萬人ばんじんの上うへに  
 秀ひいでられました、成長せいちやうの後のちには天晴あつはれ名僧なそう智識ちしきと爲なられ釋迦しやくかも達摩だつまも土足はだしで



逃出す程の者に爲り給はんことは心ある眼の見る所でありました、如何さま一休には最と尊き御位をも宛然破靴か草鞋でも脱ぎ棄つるが如く取つて捨てられ、又九重の紫雲通へる大内も己れが十方世界に亘る不羈の大智を容るゝに狭しとて其を躍り出で、佛法の大海に身を投じました、是れに入りまして後にも常に須彌の上より八宗を一目の下に睨みつけ釋迦も達摩も皆な我が藥籠中の物と爲されました、實は釋迦も達摩も一休の玩弄と爲されたことでござりました、何さま其才智は廣大無邊のことで驚くばかりでござります、殊に其賢れて秀でられましたるは頓智で事に當り物に觸れて瞬間咄嗟に出でまする智は恰も電信の如く迅速でござりまして而して其頓

智の愈々出で、愈々盡させぬのは宛然滾々たる原泉の盡きぬが如くであります、何さま一休の一舉手一投足は常に皆な智慧の運動で苟の咳唾も智慧の球となつて輾轉出づることとでござります、左様でござりまするゆゑ一休は如何なる場合に臨みまするも決して其智慧の窮する等のことはなく、常々何事も甘く遣つてのけられたこととでござります。總て世は一心の趣きやうで軽く處すれば軽く重く處すれば重くなることとでござります、今若し青き眼鏡を懸けて旅行しますれば宇宙の森羅萬象は悉く青く見ゆることとで、若し又赤き眼鏡を懸けて山野の間に立ちますれば、其身を繞る處の百物は皆な赤く見ゆることとでござります、丁度是れと



同じ道理で快樂の心をもし世に處しますれば社會の事は視るもの見るもの  
 總て快樂に感ぜらるゝことで、若し又憂鬱の心をもて世に處しますれば社  
 會の事は聴くとし聞くもの都て憂鬱の種となることでござります、其所で  
 彼の快樂の心をもて世を渡るものを名づけて樂天家と云ひ又憂鬱の心をも  
 て世を渡るものを名づけて厭世家と云ふことでござります、其所謂樂天家  
 とは外でもない即ち天を樂む者と云ふの意で、又其所謂厭世家とは外でも  
 ない、即ち世を厭ふ者と云ふの義でござります、其所で願みますれば、彼  
 の釋迦の下流を酌む佛者僧侶は總て其厭世家に屬することとござりますが  
 茲に一休禪師は全く世の僧侶者流と一變しまして、其身は墨染の法衣を着

ながらも、露毛ほども世を厭ふ心の憂鬱には染まず、恰も浮世を輕氣珠の  
 如く最と軽く見做されまして、總て何事も軽く身に受け世の人の憂しとす  
 る事も茶にして樂んだことで其狀は丁度大瓢箪を大海に投げ入れ風波のま  
 にまに任せて、人間到る所何方にも浮む瀬はありとして浮世を樂しくも飄  
 く々として渡られたことでござります、何さま白面き境遇で、此の教旨をも  
 て世の人をしも教へたことでござります、之を物に譬へて申せば、彼の釋  
 迦や達摩は極樂淨土の蓮根を掘り來つて其儘生で衆生の饜應に供したごと  
 でありまするに一休は其れでは誰れも蓮根を喰ふ者はない、斯うしてこそ  
 饜感せめとて醬油や味淋三盆糖の五味を調加しまして、是れを善い鹽梅に



割烹料理して、衆生の饗應に供したことでござります、偕てこそ衆生が喜んで歸依したことで、如何にも敬服のこととでござります。

偕ても茲に一休の本傳を演ぶるに就きましては、世の英雄豪傑又は力士、俠客の傳を演ぶるとは聊か其體を異にすること、彼の英雄豪傑等の傳は大概何が晴れくしき一大事件があつて、段々と之れに向つて進むものでござりまするゆゑ、其講談の秩序は能く整ひます、併し其秩序を整へまするには、其前後接合の轄として勢ひ或は他奇なき事をも演べねばならぬこととであります、去るに一休の傳は全く之れに反しまして、敢て一大出來事のあるにてもござりませぬゆゑ、夫れから、其れと云ふ脈の續ける講談も

致し兼ねること、實はと申せば單獨の事を多く取り集めてお話し申すこととでござります、但し其換りには何れを取りましても、皆々一粒精撰の面白講談でござります、是れが他の傳と異なる所でござります、偕て此の趣きがお解りになりましたら愈々本傳に入りてお話し仕りませう。

### 智囊小僧過失の遁辭

一休和尚の猶ほ未だ幼なかりし頃或る寺の小僧と爲られましたが、此の寺に一つの什物として蛇目の茶碗がありました、師の僧養叟和尚には最と之を大切に致されまして、小僧なぞには容易に之を見せませんでした、去



るに見せぬものとしあらば、猶ほ更らに見たきは人情の常で一休は兼々此の什物を一度見たいとは思ひましたが、如何せん此の寺の第一の寶物でござりますれば、容易に見ることもならず、一休も詮方なく其儘數月を送りましたるに、或日のことでござりました、師の僧には所用のあつて一休を遺して他臣致されましたれば一休には大に打ち喜ばれ、豫て見たく思ひし什物の蛇目茶碗を見るは此の時であると同じ朋輩なる小僧と共に之を取出して之を見ましたが最と珍らしきまゝ、兩人して打返しつゝ之を見てありましたが、餘り多く拵り廻したので、竟手外れてポカリ取落しました、落ちて敢果なき瀬戸物は憐れ微塵に碎けました、去れば一休始め兩人の小僧は

愕然として大に打驚かれ這は如何にせんと、茫然として居りままる所へ生憎や師の僧には外面より歸り來られましたれば、一人の小僧は周章狼狽まはりてありましたが、一休は胸中に忽ち一計を案じ出し卒版に師の僧に向つて云ひまするには、弟如何にお師匠様此の世に生きとし生けるものは、其生は如何になり給ふものでござるか、師是れは俄かの問ひ凡そ生きとし生けるもの皆な一たびは必ず滅す之を生者必滅とは云ふことである、弟去らば其滅するは如何に、師時節到來せることである』と此時一休には彼の蛇目の碎け茶碗を取出され之を師の僧に示して云ふには、弟お師匠様時節到來しました』と申されましたれば、師の僧も一時呆然として打驚れま



したが、去りとは賢き小僧よと深く其才智に感ぜられたさうでござります。是れに就いて一寸お話しがござります、其れは外でもない、嘗し或所の下婢が勝手に一つの瀬戸物を取落して破壊しました、此の下婢中々の頓智者にて、之を破壊すと早々椽側を二つ三つトン／＼と足音を致させて畜生々々と二聲三聲怒鳴りましたが、彼の半片茶碗を持ち來つて 婢「奥様彼の隣家の猫の畜生めが此れ此通りいたづらをして行きました」と申されました、今一休の事と併せて好一對の談話でござります。

頓智小僧師僧を驚かす

我れ人を謀れば人亦我れを計るとかにて一休の十二三歳の頃でござりました其寺の師匠には甚く飴を好まれました常に一つの壺に飴を澤山貯へ置きました之を一休小僧に食はれては堪らぬと或る一日之れに向つて云ふには「師是れ／＼小僧よ此の壺の中にあるものは大人が喰ふては敢て差支へないが若し小僧が食へば快ち毒に中つて死することですれば子供たる者は努め喰ふてはならぬことであると斯様に戒め置きましたれば先づ／＼是れにて安心のことであると己れ一人ひたものに喰ひました一休は側を向いて長き舌をペロリと吐き出し心の中で思はれまするやうは師匠能くこそ我れを子供と侮りて誑らかせり、然し我れ其手は喰はなの焼蛤である好し



我がせんやうをこそ見れと師の留守を待ち設けて居りました折節師の坊には、所用ありて一休を寺に遣して外出せられましたれば一休は大いに打喜ばれまして、豫て望める壺中の飴を嘗めるは此の暇であると、彼方此方と尋ね探しましたが、師の坊も深く隠くしたと見えまして、中々に知れませんが、漸々のこと探し出しました、場所は子供の手の届かぬ柵の上でござりましたれば、一休は臺の上に登りて取りましたが、餘り喜び調子に乗つて柵より取り下しながら、過まつて竟飴を打ちこぼしました南無三寶頭と云ひ手と云ひ衣類に至るまでベト〜に着けましたが、何がさて日頃食ひたいと思つた一心に敢て开を厭ひもせず先づ小杓子をもて二

三杯立てつけに遣られました其甘きことは譬へんに物なく、頻りに舌鼓を鳴らして引續けて又二三杯遣らかしますれば、最早舌も抜くるばかりで、有繫の甘きを慕ふ螻蟻に均しき小僧も今はとて再び嘗める勇氣も挫けましたるに如何思ひましたか、其飴壺を取つて座上に抛ち微塵に打ち破壊されました、所へ師の坊には所用もなし果て、外面より歸り來られました、去るに一休には何事にか雙手を眼に當て、潜然として泣いて居られましたゆゑ、師の坊には不審のことに思ひ、師「汝何事にか泣くにや」と問はれますると、一休の答へて云ふには、弟「左ればでござる日頃お師匠様の大切になさるゝ飴壺を竟した過失より取落して破壊しました、何と申譯もなくお師



匠様お歸りにならば、定めし甚きお叱りもあらう程、寧ろ死んで申譯を致さんと思ふに、就きましては日頃お師匠様のもうさるゝには此の飴を子供が喰へば死ぬと仰せられました程に、是れ幸ひのことである、此の飴の毒を嘗めて死なふと覺悟を定めて一杯嘗めて見ましたが、唯だ甘いばかりで死なませぬゆる、是れは未だ食ふことが少ないからであると、又重ねて二三杯嘗めて見ましたが未々死なれません、是れは寧ろ頭にも衣類にも塗つたらば死ぬることゝ思つて、此所彼所に塗つて見ましたが、何うしても死なれず、今お師匠様に面會せて此の始末、面目なきこととでござります』と申されますれば、師の坊もポーと呆然て亦言葉もなく、竟に唯だ笑つて止

んださうでござります、何さま手に餘る小坊でござりました。

### 大人小供の智恵競争

是れも亦一休の猶は幼年にして、師匠の許にあつた時のこととでござりましたが、茲に一人のこびたる旦那がありました、常々此の寺に來つて師の坊に參學などしましたが、彼の旦那常々一休の敏捷なることを感ぜられまして、折々は戯れを言つて問答などを致されましたが、或時の事彼の旦那皮袴を着て來られましたるを、一休早くも門外にてチラリと瞥て、内へ走り入りましたがへぎ板に早々書付けて門の傍らに立てられた文句に、



一此寺の内へ皮の類堅く禁制なり若し皮の物入る時は其身に必ずばち  
當るべし

と斯様に書付けて立て置れました、所へ聽て彼の旦那來られました、此の  
制札を見ましたが、一向に頓着せずツカ〜と寺内へ入りました、一休は  
之を見て忽ち馳せ寄り咎めて云ふには、小「こりや此な旦那門外の制札を見  
たるにや、旦那尤も見たることである、小「見たとあらば禁制を犯し、何故に  
寺内には入り來れるにや、旦那左ればである、此の寺の内へ皮の類堅く禁制  
とあらば、何故に寺内に太鼓を置かるゝことである、這は抑も如何なる理  
由にや、小「成程當寺内に太鼓と云ふ身に皮を纏へるものがあるが、然し彼

奴は既に我が禁制を破つたものであれば、彼の太鼓には晝夜三度ヅ、ばち  
當て、わめき鳴かすることである、去らば其方へも太鼓のばちを當て申さ  
んか』と打ち戯れますれば、有紫の旦那も閉口して一言の言葉もなかつた  
ことでありましたが、彼の旦那如何にも口惜く何うかして此の返報をな  
さんものと種々と工夫をしましたが、偶然思ひつきたることがありまして  
『來る何日徵齋の志薦めたく候程に一休を御供に御連れ成られたし』と養  
叟和尚を招待致されましたが、聽て其當日にもなりますれば養叟は一休を  
供に連れられましたして、彼の旦那の許に到らんとて、开が家の門外まで行き  
ましたるに、此の家は入口に小川の横ぎり流れて、一つの小橋のある家で



ござりますれば、是れを渡らねば此の家いへに到いたることは得叶えかはぬことござります、然るに如何なる故ゆゑでござりまするか、橋詰はしづめに高札かうさつが立て筆太ふでごとに墨すみ黒々と書かかれましたる文句ぶんくに

此このはし渡わたること堅かたく禁制きんせいなり

と斯様かやうに書付かきつけて建置たておけましたれば、養叟やうそう和尚おそうは之これを見て當惑たうわく致いたされ、一休きうを顧かへりて申まをさるゝには、師し「此この橋渡はしわたらでは此この家いへへ入いることは能かふまじ、這こは亦如何またいかに致いたさうか」と問とひますれば、一休きう少しも躊躇ちうちよせず直たちに對こたへて云いふには、「此このはしと假名かにて書かいてあれば敢あへて仔細しさいないことござります、お師匠しせう様中央まんなかをお渡わたりあれ」と申まをせば養叟やうそうも成程なるほどとて中央まんなかを通とほつて

内うちへ入はいりますれば、彼かの旦那だんな出いで來きたり詰なつて云いふには、且且和尚おせう主從しゆじゆには殊ことに筆太ふでごとに書かいたる制札せいさつを見みながら何なにとて橋はしを渡わたられしぞ、小小「否いや何なにに我等われらは端はしを渡わたらず御主人ごしゆじんには我等われら主從しゆじゆ年寄としよりと子供こどもなるを氣遣きづかひ御親切ごしんせつにも此この端渡はしわたるべからずとの御注意ごちゆうい、近頃ちかごろ忝かたじけなきことござる、折角せつかくの御親切ごしんせつゆる端はしを渡わたらずに中央まんなかを通とほつて參まりました」と之これを聞きいて有繋目あすがらみ論見ろんけんたる旦那だんなも亦開またひらくべき言葉ことばもなく其儘そのま閉口へうこうせられましたが、如何いかにも殘念ざんねんの至いたりで何なにがな不審ふしんして此この返報へんぱうをなさんものと虚勞きよらう付眼つきやなこで一休きう小僧せうぞうの身邊みのはりを見みますると、折をりも折をりとして一休きうには小僧せうぞうの身輕みがるの出立いでたちにて當日たうじつ法衣ほふえを穿うたずに俗衣きよのを着きて來こりましたれば、旦那だんなは是れ幸さいはひのことゝ、忽たちまち不審ふしん



して云ふには、**鳥凡**を沙門と申すものは忍辱二體の法衣を着罪障懺悔の袈裟を掛けてこそ眞に僧とは申すべきものでござると聞つるに如何に小僧なればとて、俗衣の出立は心得ぬことである』と斯様に不審致されますれば定めて一休は閉口さるゝかと案の外一休は幼けれども和歌一首を讀みて答へられました其和歌に

着て來たぞ本來空のくる衣

袖長からで人そこ知らぬ

と讀みますれば、**旦那**も師の坊も手を拍ち阿つとばかりに口を開いたるまゝ、**旦那**、暫時が程は其口を塞ぐこともならなんだことでありました、借ても**旦那**

**旦那**は御齋を出されましたが、今一度不審せんものと、一休には故意と魚類の膳を据ゑられましたるに、一休は這は珍らしき齋であると、ひたもの食ひに食ひましたれば、**旦那**之を見て云ふには、**鳥**小坊よ卿は沙門にありながら、何とて斯くは魚類を食さるゝにや、這は近頃合點の行かぬこととでござる、と詰りますれば、一休之を聞いて左あらぬ體にて申さるゝには、**鳥**左ればでござる、拙僧の口は鎌倉街道でござれば、皆さも賤さも敢て开を擇ぶことなく、皆な之を通行さすることとでござる』と云ふを聞いたる**旦那**には、扱けば玉散る刃の氷夏猶は寒き一刀スラリ引抜き、一休小僧の眼前へ突出されました、**鳥**如何に小坊よ卿の口は鎌倉街道とあらば此の物も



通り候か」と申されまするを、一休は毫しも騒ぐ氣色なく、小「而て亦其物は敵か味方か、且敵である、小「然らば通すことは相成らず、且否や味方である、小「けへんく、只今曲者の通るとの通告にて俄かに關がへつた何人も通すことは出来ぬ」と斯様に申されますれば、旦那も和尚も舌を巻いて感ぜられました、如何にも盡させぬ頓智でござります。

沙門鯉魚腹葬の引導

一休の猶は未だ幼年の頃師の坊に使用して書讀み手習などなして居られましたが、折節冬の夜寒むの頃でござりましたれば、師の坊には乾鮭をあつ

ものとして、獨りで之を喰はれまして一休へは唯だ豆腐などばかり與へて置れました、一休には之を見て最と羨まじきことに思はれ、師の坊に向つて云ふには、「凡そ出家と云ふものは腥き物を食はずとは聞き及びましたるにお師匠様には乾鮭をさきこし召さるゝは苦しからぬことでござりまするか、左あらば小弟もたべて宜しうござりまするか」と申されますれば師の坊も最と可笑しくおほしめされて云へるは、「師我等の如き老僧の腥き物を食するは敢て差支もなきことであるが汝の如き小僧の身として腥き物を食ふ時は忽ちに罰の當ることである」と斯様に仰せられました、一休は之を聞いて最と不審の眉を蹙め小首を傾け云ふには、「同じ人間の身として



同じ 雁かりき物を食しひ獨ひとり小僧こぞうにのみ罰はら當あたるとは如何いかにも心得こころえ雖たきこととでございませす、小弟わたくしの思おもふには老僧らうぞうは小僧こぞうより分別ぶんべつもあることとでござりますれば、老僧らうぞうこそ却かへつて觀面てきめんに罰はらは當あたることとでありませう』と冷笑あざわらひますれば、師しの坊ぼうには是これは手てとに行ゆかぬ奴やつであると思おもひましたが、左さあらぬ體ていにて云いはるゝには 師し汝なんぢ幼いとけき身みをもて小賢こせましきことを申まをすものかな老僧らうぞうとても敢あえて御佛みほとけの御許おんゆるしはあるにはあらぬが併しかし我等われら老僧らうぞうは夫それ其處そこが老功らうこうで引導いんどうをして喰くらふこととであれば、敢あえて咎とがめはないことである 一『ハア、左さ様やうでござりまするか、然しからば其引導そのいんどうと申まをすは果はたして如何いかなるものにてござりまするが、一寸承ちよつとうけたまはりたいものでござります、何どうぞお師匠しせうさま様さまお聽きかせ下くだ

さりませ 師し『偕さてく汝なんぢは小癩こしやなる小僧こぞうであるわい、イデ然しからば引導いんどうして聞きかせうか』とて一盃はい盛りたる乾鮭からさけを捧さげ箸はしをおツ取とりのべての宣たまはするやうは 汝元來なんぢがら枯木いかれきの如ごとし助たすけんとすれども生いきて再またび水すい中に遊あそぶこと能あたはず 愚僧ぐそうに服かされて佛果ぶつぐわを得えよ喝かつ と引導いんどうを致いたされましてひたものにムシャく喰くらはれますれば一休きうは傍かたはらに之これを見て最いと不審ふしんの眉まゆを顰ひそめ甚はなだ美うらましさうに見みてありましたが心中しんちゆう窃ひそかに思おもふやふは、イデく我がせんやうをこそ見みよな夜よの明あるを待まち居かまし た、聽やがて東雲しのがめも晴はれ渡わたり夜よも全まく明あけはなれますれば、昨夜さくや來らいより待まち設ま



けたる一休は、早々に躍り起きて魚市へ走り行きました。が、霎時にして最も大なる鯉を一尾買ひ求めて来られました。先づ味噌汁をして之を拵へまして、彼の鯉を魚板に取延べ左手に鯉の細首を押へ右手に出刃をおツ取り、將さに鯉の細首丁と打ち落さんと致しますれば、生憎や此時しも師の坊には偶々勝手に所用のありて入り来られました。が今しも一休が鯉の細首を打ち落さんとする此の體を見て愕然として大いに打ち驚かれ之を戒めて申さるゝには、師「是れはしたり沙汰の限りである昨夜も懇に教へたる如くに小僧の身としては、乾鮭だにも無用ぞと申したるに況してや生きて働く魚を害して之を喰はんとするは以ての外のことである」と戒めますに、

一休は少しも騒ぐの氣色なく云ふには、「嚮きにお師匠様は引導をして乾鮭を食されましたが、今小弟も亦引導をして此の鯉を食しますれば、敢て差支はござらぬことであらうと思はれます」と左あらぬ體で申されますれば、師の坊には大いに呆然れ果て、竟には笑はれました。が、一休に向て申さるゝには、師「汝开は如何なる引導にてあるにか其引導にして尤もらしくは、之を許すべきことである、若しその引導にして道理なくば、此の殺生は破戒の罪決して免し難きことである」と御家の一棒を小脇に搔込んで其引導の趣きは如何であるぞ責められました。が、一休は毫も騒ぐことなく左手に鯉の細首を押へ右手には出刃を笏に構へて引導されまするやうは



汝元來生木の如し助けんとすれば逃んとす生きて水中に遊ばんよりは  
 如かず愚僧が糞と爲れ喝  
 と引導が了りまするや否や、鯉の細首水もたまらず丁と打ち落されぐづぐ  
 づと煮てしたゝかに喰ひまして、空嘯いて居られましたれば、師の坊には  
 始終の體を見て舌を捲て驚かれ彼の棒も憂哩と投げ出されまして申さるゝ  
 には、師「世話に今年生れし猫が三年になる、鼠を取つたとか云はるゝが、  
 汝の如きものを云はるゝか、儲ても汝は唯だものにはあらぬことである」と  
 と深く感ぜられましたさうでござります。

一休山伏法力の競争

一休嘗て堺へ下向の時淀の河瀬船に乗られましたるに、折節乗合中に一  
 人の山伏が居りましたが、徒然の餘りにや一休に向つて問ふて云ふやうは  
 山「仰も御坊は何宗にてござるか」  
 一「左れば我等は禪宗である」  
 山「ハ、ア左様でござるか、禪宗には我等が如き奇特はござらぬことであらう」  
 一「否や何々禪宗には殊に奇特多きことである、其方に何にても奇特あらば現はし  
 て見せられよ」  
 山「善しく見せるとも、今我れ法力にて此の船の舳に不  
 動妙王を祈り現はして見することである」と言ひつゝ、  
 山「一に逝多伽童子



二に「鈴羯羅童子」と珠數押し揉んで祈られますれば、乗合の者這は如何になることであらうと目と目を見合せて居ましたるに、案に違はずアラ不思議や船の舳に不動妙王背後に火焰を放つて忽然として現はれ出でたした、其時彼の山伏ぢうめんを作られて云ふやう 山「如何に人々よ能く拜まれましたか」と申せば皆々大ひに不思議の思ひを爲して見て居ましたが、一休は更らに不思議と思ふ氣色もなく最と平氣にて洒然として居られまするゆゑ 山伏は一休に向ひ催促して云ふ 山「如何に禪僧よ斯る時は如何し給ふにや」と迫れば一休答へて 一「左れば我等が奇特にては身より水を出して彼の火焰を放つ不動尊を消して見することである、其方隨分共に祈りて消さ

れぬやう用心あれ」と言ひつゝやをら法衣の前を褰げ揚るよと見えましたが、彼の不動の火焰に向つてしたゝかに小便をしかけますればアラ不思議や忽ち其火焰は不動の體と共に消え失せて山伏の法力全く盡きますれば船中の人皆な一休を禮拜して奇異の想ひを爲されました、斯くて船は其指す方の目的地に着しますれば人々皆な上陸して行きまする所に折節遙か向ふより大いなる一疋の犬現はれ出で而かも山河に響き亘る程の大いなる聲にて吠えて來られますれば、彼の山伏は是れ幸ひのことであると一休に向つて云ふやう 山「如何に御坊よ先きの奇特比へには負けたるが今彼の最と恐るしの犬の怒を止め此處へ近寄する法力を現はさんと欲することであるが



御坊の奇特は如何でござる』とあるに一休之を聞いて「『开は最と易きことである先づ其方祈りて見給はれよ』と云へば山伏は『好し如何にも合點』と珠數おツ取りサラ〜と押し揉んで祈りましたが何が儲て怒れる犬は益々猛り狂ひ容易に来る様子もありませぬゆるる山伏は頻りに焦慮て『山』あびらうんけんそわか〜』と續けさまに唱へて祈りましたが、何うしても彼の犬は来りません、一休は傍らに之を見て最と可笑しく思ツて云ふやうは『其方よ其處退き給ひよ、我等は僅か犬一疋のことにあびらうんけんそわかも何も入ツたものではないイデ彼の犬の怒を止め此方へ呼び近づけて見せ申すことである』とやをら懐中より晝飯の焼飯を取り出されまし

た、遙かにその犬に一目見せて来〜〜と宣ひますれば彼の犬の怒始めの氣色何處へやら一目之を見ると忽ち尾を垂れ頻りに左右に振り動かしつゝ来りますれば、山伏は大いに驚き忽ち閉口して逃げて行かれますれば傍へに見居たる衆人咄と聲を揚げ一休に向ツては大いに賞賛し又今しも逃げ行く山伏の背影を見ては大いに打ち笑つて之を見送られました、如何にも一休の法力は手近き奇特でござります。

取換へ引換へ百萬遍敦盛の舞ひ

是れも亦一休甲斐の國に逗留中のこととござりましたが、偶々一人の浪



人一體の許に参られて申すやうは、馮如何に和尚様よ和尚様は活佛である  
 と専ら高く國中に評判さるゝことのでござるが、我身今浪々の身となつて、  
 遠く他國に來つて困難をしも重ぬること、如何にも困却極まつたこと  
 でござりますアハレ願くは活佛のお情にも此の困難をお救ひ下さるやう、  
 偏へに願ひ奉ります」と云ふ一休之を聞いて最と不憫に思はれて、「開は  
 亦何とも困つたことである、而て亦其方には何か一門親類はなきや」と尋  
 ぬれば、彼の浪人答へて云ふには「馮左ればでござります、私に一門の親  
 類がござりまして、殊に大身紳士にてござりまするが、私事少しく面伏の  
 ことあつて参られ悪く、且つはチト遠路にて路銀もなく、如何にも困却

仕ることのでござりますれば、アハレ和尚様のお蔭にて何とも一身糊口の  
 道にあり付くことでありませれば、何れとも宜しく頼上げますると只管に  
 懇願しますれば、一休も扱這は是非なきことであると思召されて、更らに  
 尋ね問ふやうは、「其方には身に覺えたる藝能はなきや」馮「何も是れぞと  
 申す藝能もなく、總て不調法不器用にてござります、是れには殆々困却さ  
 れました」「否や」其方も紳士の成り果てと見受けらる、何ぞ一藝のな  
 き筈もなからう、禮樂射御書數の六藝の中何か一ツ身に覺えたるものはな  
 きや」と一々指折り僕ひて問尋ねれば彼の浪人之を聞いて一々之を存せぬ  
 と答へまするにぞ有繋の一休も殆んど拂子を投げられて云ふやうは「か



、ア左様であるか、借ても困つたことである、浪人となつたも無理ならぬことである、種なき手品は遣はれぬ、如何にも閉口したことである』と苦笑して霎時思案に呉れて居ります、此時彼の浪人の申しまするやうは、**瀟和尚様**よ私事別には是れぞと申す能藝は一ツも覚え申さぬことでありまするが、少々故あつて唯だ**敦盛**の舞ひのみ一番聊か存じ申してござるが是れにては如何工夫はござらぬか』と云へば一休之を聞いてハタと横手を拍つて『夫れく其れにて手品は遣はれると始めて天に登る階子も出来たことであると、夫れより此の浪人を不憫と思ふ者にて鼓などの打てる者を語らひ集めて遽か能舞の狂言を催されましたが、一休先づ**廣告吹聴**は大

さいのが善いと**天晴高札**を建てられました、其文句に  
 一此度上方より**幸若罷下**勸進能仕る勸進元は日本老和尚一休と斯くなん書載られますれば這は珍らしきこと、士は申すに及ばず町人百姓に至るまで五里或は七里の里程を厭はず、貴賤老若群聚して、差しもに**廣き芝居小屋**もメリく破れも裂んばかりの大入にて、能と盛大の様子を極めました、左れば**黒山**の如き見物は今ぞ**天晴**の能舞始らんと頻りに踵を延し眼を張りて視て居りますると、應て彼の浪人は装束を着け最とも氣高く身づくろひして、舞臺へ立出られました、千萬の見物人は素破こそ出でたれと云ふ彼の浪人**敦盛**を一番舞ひ濟まして、**樂屋**へ入りますると、是れ



と引違ひに一人の男が出て来りて口上陳まするやうは、男「四方の御歴や様御入り御見物の段樂屋一同に有難存じ奉ります」と厚く一禮を陳べて男「偕て此の次ぎは何をか舞せ申しませうか、御好み申述べられたうお望みに従ひまつります」と云へば見物の客は口々に大職官が善い否や何に高館が善い否や〜清繁が善いと各々思ひ〜のことを言ひはやして注文して居りますると豫て言ひ合せたる五七人の惡漢共此處彼處より躍出で叫ぶやうは、惡「否や何に外の舞は見たくない矢張り今の敦盛を舞れよ」と云へば彼の樂屋より出で來れる男の云ふやう、男「同じ舞ひは或は御退屈のことてがなござりませう」とあるに彼の惡漢共又重ねて云ふには、惡「否や何ん

でも乃公等が敦盛が好きじや是非に敦盛を再び舞はられよ、若し敦盛を舞はぬとならば、此の芝居小屋を踏み潰して仕舞はん、敦盛を舞はぬか何うだ〜」とあれば彼の樂屋より出で來れる男己むを得ず、男「然らばお望みに任せ再び敦盛を舞せられませう」とて應て復た再び敦盛を舞ひました、斯くて舞ひ果てますれば、前きの男又舞臺に出で來りて口上を觸れますれば、此時しも又以前の惡漢共現はれ出で、云ふやう、惡「又々敦盛を舞はれよ、左なくば芝居小屋を踏み潰さんか如何に」とあるまゝに是非なく續けさま四五番同じ敦盛を舞はられまして、男「偕て今日は是れにてお暇乞ひと見物人を追出されましたが、木戸口にて大聲に呼はつて云ふやうは、男「明



日は狂言取換へ御覽に入れまする程に又々御見物下さりませ、エイ評判評判」と觸れられますれば愈々翌日となると前日よりは一層大入で其見物の混雑は中々に譬へんに物もなきこととでござつたが、愈々幕が開けば御定りの敦盛の舞ひにて一番舞ひ終れば又前日の如く、豫て仕組んだることでありますれば、取換へ引換へ續けさま五六番の敦盛にて、偕て其日も亦はねましたが、又々翌日も相變らず敦盛にて此の如く前後七日まで同じ敦盛を舞ひましたれば、日に五六番ヅ、にして、凡そ四十番前後も敦盛を舞つたことで彼の浪人も之れが爲めに一廉の資金をも作つたさうであるが、此事遂に地頭の耳に入りましたれど、一休の爲したる業なればとて別段御咎も

なく濟みましてござる。

一休風の神と爲る

一休和尚は屈伸自在の體で時に由つては屁とも爲り又風ともなることとでござります、一休嘗て關東へ趣かれまする時供人など足手纏綿あるを最と五月蠅きことに思はれ、其身はズツと變化して普化憎と爲られ尺八を吹いて道行かれましたるに、或る一日の事途中にて豫て見知れる山伏に逢はれました、山伏はチラリ一休を見ますに、此の體でござれば何に知らぬ體にて一休に向ひ問ひ掛ぐるやうは「山如何に普化僧殿何方へ參られまする



か」と云ふに「休答へて申すやうは」「左ればでござる、素より普化僧の身の何方と定めなきこととでござれば、唯だ風に任せて何れなりとも風のまに／＼行くこととでござる。山へ、ア左様でござるか、然らば若しも風なき時は如何なさるゝこととでござるか」「左れば其時は是れ此のやうに自ら吹いて行くこととでござると其儘腰なる尺八を取って吹き東國を指してサツサと行かれますれば彼の山伏も亦此の體を見て、呆然として其背姿を打眺め西と東に別れ西國指して行かれたさうでござる。何さま電光の如き頓智でござります。

一休の慈悲猿猴を感動す

一休會て伊豆の國へ參られ、只ある山家の近邊を通られまするに、或る家に一疋の猿を捕へ柱に之を縛り付け噫な無慘や頻りに之を打ち敲き既にうち殺さんず勢ひに猿は最と憐れなる聲を放つてヒ、と泣き叫んで居りました、折節一休和尚此の處を通り掛られました、今しも此の啼聲を聞いて最とも不憫に思召され懇にも山人に乞ふて猿を貰ひ受けて山に之を放ち遣りましたるに猿は大いに打ち喜んで山又山を指して走り行きました左れば一休は今日は善い功德をしたと獨り自ら喜び其近邊に兩三日逗留して居



りましたが、折節夏のことと或る一日の夕方前きの救ひ扶けし猿蓐を露の葉に包みて持ち來り恭しくも一休の前へ差出されました、如何さま前日の恩を覚えて居り獸類ながらも聊か其恩を報い返さんとして、斯くは時候の物已が住所より持ち來つて獻じたこととあります、左れば一休も最と可愛く思召され有合せの布袋に豆を入れて聊か返禮の意に與へられますれば猿は頻りに推戴して歸へられました、彼の猿又重ねて其袋に粟を入れて來り一休の前へ恭しく捧げて歸へられますれば一休も殆々感に入つて後に或る旦那の許に行きて深く感じて物語られましたさうでござるが、如何にも感心なこととござります。

一休極大宇宙の笠を被る

一休關東より上方指して歸るさに道すがら或る大名と後になり、前になりて上られました、頃しも舊六月の末つ方にて恰も宇宙火焔の爐にあるが如く、殆々暑氣に堪へ難くありましたるに噫な強や鐵にても造ららし身體にや一休笠をも被らず最と平然として日の下を歩からまするにぞ、彼大名遙かに之を見て嗚呼可愛相なことであると忽ちに惻隱の心を起し元來チト心のやさしき大名でゝりましたれば早々に使者をもて申越れまするやうは「大」笠被りてすら堪へ難き此の炎天に御坊はなどて笠をめさいるか幸



ひに此方に持合せたる笠之れあるまゝ、チト古くはあれど先づ是れなと被らせられよ』と一蓋の笠贈られますれば一休も禮を正うして申されまするやうは、『是れはく、御志の程近頃最と忝なきことには候へ侍りまするが、此の愚僧は青天を笠に被り居りますれば別段に羞して暑いことも寒いこともござらぬ、宜しく御主君に返事して給はれよ』と使ひの者之を聞いて一時呆然としてあきれましたが、何は兎もあれ疾く主君に復命せんと其儘取ツて返して是れく斯うと、主君に言上しますれば其主人なる大名の君も之を聞いて宣ひますやうは、『大ハ、ア左様であつたか左様なれば其れにて善し如何さま此の坊主は唯人にてはなきぞ、必ず馬のけあげも掛けぬやう

日蔭を通り過させよと猶ほも後になり前になり段々と西を指して参られまするに懸て日も西山に傾きて或る旅宿に着きましたか彼の大名は亦使者をもて申越されまするやうは、『大御坊はお構へなく御随意に同宿めされよとありますれば一休點頭きて懸て程なく暮方に及びて同じ旅宿に泊られましたるに、其夜又彼の大名の方より使者をもて一休の方へ申越れまするやうは、『大書程笠を参らせんと申したる者にて候が旅行は物憂きものでござるに此頃の暑さに左こそ勞れたることとござらう程に御酒一献参らせたくとの寸志厭はしからずば、此方へ御越し下されたしとあれば一休も恭しく禮を返し、『是れは過分の御事にてござる、左らば御言葉に従ひ推参仕



ることであらう」として直ちに其使者の案内に連れて彼の大名の君の居らるゝ奥の間へ通られますれば、大名は一目之を見ると直ちに聲を掛けて云ふやうは、「如何に御坊よ日本國の習慣人に逢ふ時には笠を脱ぐところ承はるに何とて笠は脱ぎ給はざるにや」と其言葉の下に一休直ちに「左れば脱ぎても置くべき所ござらぬ、因つて已むを得ず笠被りしまゝにて推參失禮御免下されたし」と答ふれば大名の君は之を聞いて偕てこそ浮説に聞きし一休にてあらんと推し愈々種々の珍味を盡して饗應されましてござる、又其席に於て様々の面白き問答などもあつたさうでござるが、并は竟に之を聞き漏らしました、如何にも残念のこととござります。

### 一休の輕口嗟咄の容辭

一休嘗て甲斐の國へ下られます時、土地の何某と云ふ者豫てしも一休座即の答話神妙なる趣き聞き及んであつたることとでござりましたれば一休の當國へ下向と聞いて這は序で宜しい時であるイデヤ此時を機會に一休頓才の答話面に聞かんものと心算既に定まつて一人の童子を呼び近づけて云ふやうは「某今にもあれ一休和尚此處を通らば生悠磨のとき如何と申されよ、其時和尚何とか言は、直ちに喝と云つて立去られよ」と斯う言ひ含めて教へましたが、常に聞き慣れぬ言葉でありましたれば、童子には一寸



覺え難く、小首を傾けて合點行かぬ體であれば、某は重ねて諭し云ふやうは、某「夫れ生の字はナマと云ふ字であるぞ而て又慙慙は彼の日頃汝ちの好きなる芋をインとはねたるものと覺えよ、斯う物に依りて覺えて居らるゝが善いことであるわと最と慙にも教へて置き一休の通り今ぞ遅しと待ッて居りました、只も知らぬ一休は何心なく不圖しも此處へ差しかゝりますると豫て待ち設けたる童子彼の事言はんとて走り出でましたが、生憎や生慙麼の本事はスツカリ忘れて仕舞ひ、唯だ其記憶の助けにとて物に依せたるものゝみを覺えて居り何とも分かず一休を見て「童いもの時如何」と問ひ掛くれば一休取敢へず「養ても善し焼いても善しと答ふ彼の童子は之を

聞いて教への如く「童喝と云ふに一休透さず」「るぐひか」と申しますれば何某は傍らにあつて此始終の間答を聞き童子の間違可笑しくも左りとは亦一休の頓才最とく敬服のことであると深く感せられましたさうであります。

黴治毒療の狂歌

爰に大和園峰の薬師と云ふは靈驗最ともあらたなる御佛とて願あるも願なきも、常に參詣の人群聚して嘗て人の絶えしことはないことでありました、或時の事黴毒とて悪しき瘡毒の病に惱める者がありました、此の薬



師に七々四十九日の間跣足詣の願を立て日々怠慢なく詣で既に四十有餘日ともなり最早願果てに間近くなりましたが、何とも少しの靈驗もなく身の瘡は依然として離れずありましたる程に大いに如來を恨んで散々に悪口して居りました所へ、折節一休和尚都より此處へ下向ありと聞いて這は序で宜しい所であると急ぎ迎ひに出で一休に對面して云ふやうは、或如何に都なる一休和尚よ聞いて下さりませ、私が微毒に惱み此の薬師如來に願を掛ること七々四十九日而かも最早四十餘日願明にも間もなきに今に少しの靈驗もないのは如何なる故でござるか、和尚様は豫てしも當代の活佛と承はるアハレ願くは此の瘡直る工夫御教へ給はりたし』と申す一休之を聞き

て云ふやうは、『否やとよ如來の靈驗がないのではない、未だ汝が身に足らぬ所があるからのことである佛を恨まず汝が身を恨まれよ、去りながら我れ一ツ祈る工夫のあれば、汝更らに如來に祈られよ、开は外にてもない我れ今一首の狂歌を認め遣はす程に、汝今宵薬師堂に詣で、此の狂歌を讀まれよ、急度靈驗あることである』と申せば彼の者大いに打ち喜んで急ぎ取つて返して薬師堂に詣でましたるに、頃しも五月中の二日のことにて、貴賤群聚の開が中には或は現世安穩後生極樂と祈るもあり、或は南無薬師琉璃光如來彼れを助け給へ、是れを救い給へなど、頻りに口々に言ひ祈りて物騒がしく心も定かならぬば、彼の微毒病る者霎時内院に入つて人の静



まるを待ッて居りました、彼是れするうちに最早夜も深更に及びますれば皆下向して燈明の法師と其黴毒病める人とはかりになりました、左れば彼の者茲そと一休の與へられし狂歌を取り出し最と物靜かにも謹んで讀み上げました其狂歌

南無薬師諸病悉除の願なれば

身より佛の名こそをしけれ

と斯くなん讀まれました、是れは薬師と云ふ名は薬と云ふ字を書いて病人の爲めには其身よりは寧ろ其名がをしきことであるとの意で彼の病人之を讀み上げますると此時内院より最と清かにも氣高き御聲にて

村雨はたい一時のものぞかし

己がみのかさそこに脱ぎ置け

と返歌されますれば、彼の病人は噫々有難の佛勅やと霎時禮拜して立ち上ツテ見ますれば、噫不思議や身の瘡は落ちて跡かたもなくツたさうでござるが這は餘りな不思議の話で開明の今日ではチト受取悪きこととでござるが其佛勅と云ふ返歌の意は篋笠は村雨の時にこそ入れ晴れて後ちは入らぬものである、左るに村雨と云ふものは唯だ一時の間のものであれば、聽て追ツつけ篋笠も入らぬこととなることとであると云ふにあッて而て其篋笠と云ふを身の瘡と云にかけて云ツたもので一時の村雨が濟めば、聽て身の瘡も



不用にて其處に脱ぎ置け身は軽くなつて全く微毒も治すると云ふの意を述べたことであります。如何にも一寸面白き歌でありますが、是れは或は一休が彼の燈明の法師に内々言ひ含め置いて斯くは佛勅の返歌として詠ませたことではなござりませう。

上より上に下れる難問

或時の事でござりました、京都紫野大徳寺の和尚或人より一ツの難問を起されて「或下から上に下るものは何であるか」と問はれましたるに、有繁大徳寺の老和尚も是れには大いに閉口されました兎さます斯うさま種々と

考へましたが、遂に其答案も出でず頻りと苦慮の末憐れ果敢なや黄泉の客と爲られました、然るに此の和尚殿其答案を得ざるを如何にも遺憾に思はれまして、死んでも浮ばれず、毎夜々々其寺の後住職の枕邊に朦朧と立ち現はれまして、何とも別かず「幽下から上に下るもの」と云ひて何方ともなく消え失せます、此の如きこと毎夜でござりますれば、後住も之を解さかね且つは毎夜のこと五月蠅く堪り得ず、大徳寺を辭し去るものが多きことではござりましたが、茲に有名なる一休和尚が遂に此の大徳寺の後住職と爲られましたところ又例に由りて其夜から枕邊に立ち現はれて「幽下から上に下るもの」と云ひますれば、一休之を聞いて云ふには「是りや幽



魂よ卿は下から上に下るものが解らんで浮べぬか、去らば我れ之を示して  
浮ばせんとして一首の和歌を詠せられました。

藤棚の水に寫りし花の影

下より上に下るものかな

と斯くなん詠せられますれば、彼の先住の幽霊も莞爾として大いに笑まれ  
安心の體にて消え失せられましたが、其翌夜よりは再び出なくなつたさう  
でござります。何さま面白き和歌で龜井戸などへ行きますれば、此の下か  
ら上に下る花の影は見らるゝこととでござります。

一休別號命名の所以

一休と云ひまするは此の禪師の別號でござりまするが、一日或人來つて  
問ひまするには、『抑も和尚殿の一休と名づけ給へるは如何なる御意にて  
ござりまするか』と尋ねますれば、一休答へて申すには、『是れは能くこ  
その御尋ねでござるが、併し是れには敢て深き意もなきことであれば、別  
段に話し聞かすへさやうもなきことである』として一首の和歌を讀ままし  
た。

有漏路より無漏路へ返へる一休



雨降らばふれ風吹かばふけ

と斯様に仕れば彼の問ひつる者。○「偕ても面白さうなる和歌であるが、其有漏無漏とは如何なる事のでざるか」と重ねて尋ねますれば、何とも別かず一休和尚には拂子を取つて彼者の顔をゾロ／＼と撫でますれば。○「イヤ這は何事を爲さるゝことのでざるか、何とも心得ぬことである」と大いに打ち驚かれますれば、一休徐ろに謂つて申しますには。○「其何とも心得ぬ所が即ち無漏路である、又其ハツと打ち驚きし所が即ち有漏路であると斯う悟られますれば、彼の者大いに感ぜられました。○「是れは／＼即時に大事を授かり最と忝なきことのでざる偕て其和歌の一やすみとの趣きは心

得ましたが、其雨降らばふれ風吹かばふけとは如何なる意にて候か」と問ひますれば、一休答へて。○「左ればよ固と僅かの道のことであれば、雨も風も厭ふことではない、別段に深い意味のあるにてもない唯だ是れだけのことである」と申す、彼者又重ねて。○「偕ても難有き御歌にてあるかな、試みに只今授かり申せし心を一首詠みて見ん」とて。うろじむろじ一休ぞと聞くときは

十萬億土すくさきとしる

と斯様に仕りますれば一休之を聞いて善哉々々としてドウと尻を突いて樂しむ喜ばれました。



蜷川新左衛門の參禪

太白があれば、杜甫があり東坡があれば山谷があり又三馬があれば一九があるの習ひで同じ時代に一人の瓢きんものがあれば、又之れに對する一人の洒落ものがあつて二人の間に最と面白い話しもあることとでござりまするが、茲に一休の相手には蜷川新左衛門尉親當と云へる頓才家があつて、此の兩人の間には常に面白い話しが數多くあることとでござります、抑も此の新左衛門と云へるは久しく禪學に身を寄せ日頃頻りに心を苦めて之を研究して居られました、當時紫野大徳寺の一休和尚は禪道に於て二なきも

のと聞き傳へまして、或る一日の事一休の草庵を尋ねて參られ柴の扉をコツ／＼と敲れますれば折節一休には庵室に居られました、やをら身を起して出で來られました、「我が庵室を訪ふ者は抑も何れの人にて候ぞ」新「否や苦うも候はず、佛法修業の大俗參りたることにてある」と申されますれば一休も這は奇妙なる男と思ひますれば何かの寒暑談は偕て置く短刀直入に問ひを起して

- 問ふ汝は何方の人ぞ
- 答ふ和尚と同國
- 問ふ國には何事も侍らぬか
- 答ふ鳥はカア／＼雀はチウ／＼
- 問ふ此所は何方とか知るや
- 答ふ紫に染めたる野邊



問ふ如何として染めけるや

答ふ尾花朝顔紅菊紫蘭

問ふ散りて後ちは如何

答ふ宮城野が原

問ふ原には何事か侍る

答ふ水は流て沈々風は吹て颯々

と斯様に水の流るゝが如き問答に一休も殆々感に入りて新左衛門を請じ小坊主に命じ「茶を参らせよ」とて一首の和歌を詠せられました、其和歌に。

何をがな参らせたくは思へども

達摩宗には一物もなし

と仕られましたるに、新左衛門も左るもの忽ち返歌をして詠じまするやう

は。

一物もなきを賜はる心こそ

本來空の妙味なりけり

と申されますれば「是れはく、蜷川殿には豫て聞き及びしよりは中々の道心者にてござる」と大いに感せられましたるが、夫より四方山の談話を爲されましたるに、時に新左衛門の申されまするは「新」和尚殿少々問ひ参らせたきことがござる。「委細承知してござる、何なと御問ひあれ」「然らば御問ひ申さん邪正一如とは是れ果して如何なる意に候や」「左ればなり」と答へて



生れては死ぬるなりけりおしなべて

釋迦も達摩も女子も杓子も

又問ふ空即是色とは如何答へて

白露の己が姿は其まゝに

紅葉におけばくれなるの玉

又問ふ色即是空とは如何答へて

花を見よ色香も其に散り果て

心なくても春は來にけり

又問ふ世法は如何答へて

世の中ぞ食ふて糞して寝て起きて

さて其後ちは死ぬるばかりなり

又問ふ佛法とは如何答へて

佛法とはなへのさかやき石の髭

繪に書く竹のともずれの聲

と斯くなん一々問ふ言葉の下に而かも咄嗟の間に和歌もて答へられますれば、新左衛門は舌を捲いて大いに驚かれました。新借ても和尚殿には聞きしに優る活僧にてござる哉、最と頼母しく存することとでござる、左れば此の後ちとても愈々道を御示し下されたく、希望致します、左りながら今日



は何時まで語るも濱の真砂の数々にて盡させぬことであれば先づお暇申  
 します』とて垣の邊まで歸られました。遽かに手をハツと拍たれまして  
 新「是れはしたり、一大事の安心を忘れました。偕て佛には如何して成られ  
 まするぞ」と善ひますれば一休は心中窃かに彼奴にくはせものであるわい  
 と思はれましたが、左あらぬ體で「其は最と易きことである」と申しな  
 がら空向きてふんぞり返り、目口をひろげまして「斯うしてこそ佛には  
 成られる事であると示されますれば、新左衛門大いに打ち驚かれました  
 新「噫是れは和尚殿には誠の活大禪師にてござると、深く感じて歸へられま  
 したさうでござります。」

蜷川新左衛門大風雨の見舞

蜷川新左衛門尉親當と申すは素と能州蜷川村の郷士でござりましたが、  
 一休和尚と懇親を結びし後ち故ありて京都に住されましたるに、或る一年  
 の秋八月の下旬に偶々大雨風がありました。洛中洛外の家屋堂塔は皆な多  
 少の損害を被らぬはなきこととでござりましたれば、茲に蜷川新左衛門は這  
 は大變である、斯くては紫野大徳寺も心許なきことであると取る物をも取  
 り敢ず一人の下僕を連れ飛ぶが如くに一休和尚の許へ見舞に参られました  
 申しますやうは、新「和尚殿にはお内に御座るがナント殊の外なる大雨風に



て御寺は何所も損傷はござりませぬか』と訪はれますれば、一休折節在宅にて早速出て来りて、『是れは誰人かと思ひますれば、蟠川殿にてござりますか、誠に稀れなる大風雨にてござるに態々の御尋ね忝なく存じます、幸ひに當寺は何事も之れなきことであれば、先づ御安心下され』と申しながら忽ち咄嗟の間に一首を口吟せられました其和歌に

我宿は柱も建てず葺もせず

雨にも濡れず風にも當らず

と仕られますれば、新左衛門之を聞いて、『和尚殿其御庵は何方にかござる』と問ひますれば、一休莞爾として笑れ、『左ればにてござる外にても

なし』とて又一首の和歌をもて答へられました

我庵は都の巽しかぞすむ

よを宇治山と人はいふなり

と斯様に仕られますれば、新左衛門も亦莞爾として笑れながら、『借ては和尚殿には喜撰法師と共に相住みなされますかと戯れますれば一休答へて、『否やとよ拙僧は喜撰法師より借り居ることにてござる』新ハ、ア左様でござるか』然らば和尚には借家殿にておはしまするか』と笑はれますれば、一休又一首の和歌を詠せられました、其和歌に  
假りの世に貸したる主も借り主も



貸すと思はず借ると思はず

と斯くなん讀まれますれば、新左衛門大いに感せられましたて、是れを其扇面に書き留められましたたが、又更らに云ふやうは、新「一寸に参りましても得道の徳があることで誠に忝ないことでござる」と大いに喜び聽て別れを告げて門外に立ち出でられましたたが、何思はれましたたか急に取つて返へされまして云ふには、新「借ても先刻より種々と面白く可笑しき戯言など伺ひ竟迂かくと問ひ奉るべきと思ひしこともスツカリと打ち忘れてござるが此の思ふ事を忘れて歸らんとする意は如何心得て宜しきものに候へますぞ承はりたきことでござる」と一首の和歌を詠みて問はれましたた其和歌に

吹くときはもの騒がしき風なるが

吹かぬときにはいづちななるらん

と仕りますれば一休之を聞いて直ちに返歌せられまするには

吹くときはうへ騒がしき山風も

吹かぬときには吹かぬなりけり

と仰せられますれば新左衛門は驚嘆極りて一言の言葉もなく、唯だ霎時一休を禮拜して歸られましたてござる。

蜷川新左衛門笥の手打



其後ち蜷川新左衛門の邸宅と一休和尚の庵室たる大徳寺とは並んで相接して居りましたが、或年三四月の頃でありました大徳寺の藪の筍が垣を潜りて新左衛門の庭中に突如と生ひ出でましたが、而かも二本まで大いなるものが出でましたゆゑ新左衛門は之を見て莞爾として笑まれつゝ、傍らの下僕を願みて云ふには 新「今我れ此の筍を取つて喫りやうと思ふが何うだ 僕「其れは宜しうござります、随分と面白いことです小僕が抜きませうか 新「否や待て暫時、隣家の主人が主人で夫の奇人であれば若しも尋常の事して掘取らば、必ず彼是れと面倒も生ずることであれば姑らく我が爲さんやうをこそ見れ」と云ひながら應て太刀提げて庭に下りましたが、彼の筍に

向つて云ふやうは 新「其方儀武士の庭内をも憚からず、無断にて入込む段不届千萬無禮者め、只今主人の手を下して手打ちに致して呉ん」とスラリ一刀を抜くよと見えましたが、應て二本の筍は根本よりバサリ斬り取られました、一休此事を聞いて家人に向つて云ふには 「有弊は新左衛門である能くも計れたことである、併し我れ彼れを驚かして呉れる事である」と使者をもて申越されまするやうは 「仄に聞く所に據れば只今罪人お手打ちの由承りましたが、最と不憫に候まゝ役目に任せ死骸は此の出家に御渡し下されたし」と斯様に申遣はされました所、新左衛門も去るもの中々に其手はくはず透さず彼の使者に返事して云ふやうは 新「左れば其死骸の



事であるが實は御手数數も如何と存じまして、死骸の儀は早や既に臺所に於て火葬致し候まゝ、和尚殿折角の思召に任せ彼れが着たる衣服なりとも遺族の人に參らせん』とて彼の笥の皮のみを送り遣はしますれば、一休之を見て大いに笑ツて申さるゝやうは「一偕てく新左の頓智も近頃は大きいに進んだことである」と深く感ぜられましたさうでござります。

蝮川新左衛門の角池を一休丸く見る

或時のこととでござりました蝮川新左衛門、何か心ありげに四角なる池を堀り穿たれました、如何さま金魚など入れ置くものと見えました、左るに

一日开が友一休和尚來られましたして此の池を見て、何か懐紙を取出されサラくと一筆書いて池の傍らに建てられました、其文に曰く『此の池丸池』と斯様に書れましたれば、新左衛門之を見て甚だ不審に詰り問ふて云ふやうは「新是れは和尚殿には奇怪なことを書き建てらるゝものではござりませぬか、此の池は見らるゝ通り誰れが見ても面り現に角池ではござらぬか左るに丸池とは心得ぬこと、這は抑も如何なる所以でござるか其所以承はりたいこととでござる」と申されましたるに、一休答へて云ふやうは「左ればである此の池如何にも能く清んで居ること、實に清みさつて居る既に隅みされば角なき丸池ではござらぬか」と一本くはされ有紫の新左衛



門も何んと返す言葉もなく、其儘閉口されましたが其後の事或る一日大夕立があつて、之れが爲めに池の水は全くの濁水と爲つて底も別かすなりましたれば、新左衛門是れは幸ひの事であると早々人を遣はして一休を迎へ之を指し示して云ふやうは「新和尚殿先日は此の池清みきつたに付き、九池であると仰せられました。今日は全く濁つて少しも濟みけがござらぬば何んと是れは角池にてはござらぬか」と申せば一休又ぬからず即座に答へて云ふやうは「否や、未だ中々角池にてはござらぬ、矢張り依然の如く九池にてござる、何故なれば斬う濁つて居ては清まないことである、既に澄まのないのは取りも直さず九池ではござらぬか」と申されますれば、

新左衛門呆然一驚を喫し何んと復た返す言葉なく、其儘閉口されてござります。

蛭川一休念佛奇談

蛭川新左衛門親當或る一日一休の庵室を訪ひ、四方八方の話に時を移しました。毎度新左衛門は一休の爲めに言ひへこまされ、如何にも残念に思はれ今日は一番和尚を困らせて呉んとて、問ふて云ふやうは「新和尚殿世にも合點行かぬは彼の念佛の稱號でござるが、其唱へ方には色々あつて「ナムアミダブツ」とも唱へ又「ナンマイダー」とも唱へ或は「ナム〜」



とも唱へることとでござるが、斯く色々々に唱へて利益に變りがあるものでござるか、但し又別に變りのないものでござるか、若し變りがあるものとすれば僅か一口の言葉の相違で利益が薄くては、誰れしも其利益の薄い方の念佛を唱へるものもないことである、若し又別に其利益に變りがないと思れば其やうに、色々な念佛の言葉を作らぬとも善いこととでござらうと思はれます、孰れとも合點の參らぬは念佛の唱へ方で這は抑も如何なる所以でござるか、和尚殿の知識の教へを仰ぎます』と詰るが如くに問ひまするには、一休には何等の答へもなく卒爾に『蜷川殿』と呼ぶ新左衛門 新ハ何んでござる』と云ふに何とも別かず一休又『新左衛門殿 新ハ何

んでござる 一『否や何に親當殿 新ハ、是れは又屢々のお名呼び、何んとしたることとでござる』と新左衛門は最と不審の眉を擡めますれば、一休は莞爾として笑まれつゝ左あらぬ體にて他の事を話し出しまするにぞ、新左衛門は愈々不審に得堪へず、一休に向つて云ふやうは 新和尚殿先刻より屢々お呼びなされたが何の御用でござりますか、其れに何ぞ御用の仰せもなく拙者の返辭を聞きしのみ、他の談話にお移りなさるゝ御眞意は、抑も合點の行かぬこと其れ將た何ぞ深き御趣意にてもある可き事に候か、承りたきこととでござる』とあれば一休云ふやう 一『是れはしたり御返辭は疾々に申上げてござるに、未だ御合點がなきは其不審は返して此方にこ



そでござる、左るに猶お解りなしとあらば貴君先づ蜷川殿と新左衛門殿と親當殿とは、何れ丈けの差異がござるか御示し下され』と申せば新左衛門始めて覺り大いに閉口しました。

蜷川一休五戒問答

或時のこととでござりました蜷川新左衛門が大徳寺に來られまして、一休と佛法の話などをして居られました、一休の申さるゝには『ナント新左衛門殿歎はしいことではござらぬか、近時の出家は兎角に志薄く昔し御佛は五百戒をさへも保ち給へりと聞くからは、責めては其數とりの五

戒だけでも能く保ちたきことである 新「成程左様で誠に沙門は申すに及ばぬこととでござるが、俗の上にては責めては此の五戒だけは保ちたきこととでござる」『否な何に俗は是非もなきことであるが、役目柄出家には保せたまことであるが、併し廣く見渡し深く察するに天下にありとしあらゆる物皆な一として其五戒を保つものはないことである、今手近く此の僅か一尺程の扇子さへも五戒を破ることでありませれば、況して僧俗生きたし生けるものとして五戒を保つことのならぬは尤ものこと、亦是非もないこととでござる、新「是れは申されたり此の扇子も五戒を破るとナ申さるゝが、中々に奇妙なることを云はるゝ哉、是れは又例の和尚の輕き出來口にて候はん、



イテ然らば扇子の五戒破りを一々問ひ参るべければ、和尚答へて聞かしめ給はれよ、何時もの御頓作の輕口承りませう。『左あらば一々問ひ給へ答へて見申しませう。新』然らば問ひ申すべし』とて

問ひ申さん 如何なるものか是れ扇子の殺生戒の破戒にて候や

答へて云ふ 竹截りて骨とは爲さるや

問ひ申さん 如何なるものか是れ扇子の偷盜戒の破戒にて候や

答へて云ふ 虚空の風を偷まぬや

問ひ申さん 如何なるものか是れ扇子の邪淫戒の破戒にて候や

答へて云ふ 要とく合はざるや

問ひ申さん 如何なるものか是れ扇子の妄語戒の破戒にて候や

答へて云ふ 書虚言を書かざるや

問ひ申さん 如何なるものか是れ扇子の飲酒戒の破戒にて候や

答へて云ふ 開いてざらん言はざるや

と五戒の問答首尾結了しまして、『ナント新左衛門殿、是れは扇子の五戒

を破れるものにてはござらぬか。新』是は今に始めぬ御明答でござるが、又

一入面白き御答へ如何にも感服致しました、但し其の五戒のうち偷盜戒の

御答へに對し聊さか不審申したきことがござる。『して開は亦た如何なる

不審にて候へまするか。新』否や何に開は外にてもござらぬが、古語に扇是



日本扇、風不日本風とか申されまするが、今此の語に據つて考へますれば、扇子は是れ日本の扇子を動しまして風は日本ばかりではなく、所謂千里同風と申しますれば其盗むと申すは、抑も如何なる所以にか最と不審のことに候』と滑稽半分に申しますれば一休何とも別かす突然、「新左衛門殿」と呼びまするに「新あッ」と答へまする口の下より一休は直ちに一首「春もなく香もなき人の心こそ

呼べば答ふる主も盗人

と詠まれますれば新左衛門大いに感に入つて「新奇妙即座の御口かなあはれ願くば先刻より始終の問答、一筆書付けて賜はりたし」と請はれました

るに一休も早速承諾して、一筆走らせて書いて與へますれば新左衛門は、大いに打ち喜ばれました之を表具して掛物と爲され、深く之を秘藏せられたとか申します、實に咳唾も珠玉となりて輾轉立板をまるぶが如き、即妙の答へで如何にと敬服の至りでござります。

蝮川新左衛門の臨終一休の引導

蝮川新左衛門は性來萬人に優りたる才智あるものとは云へ、殊に此の年頃長く一休の許に參禪に來られしことでもござりますれば、遂には佛法の正法眼藏をも窮めたことでありましたが、茲に定業盡きましたるは人力の



如何ともすること能はざることで、久しく疾病の床に臥しましたが終に氣息も絶々になり、一門の人々皆な馳せ集まりまして今はの限りに名残りを惜みて戯戯して鼻うちかむもあり、或はヨ、と聲揚げて泣くもありまして餘外の見る目も最と憐れにて知らぬ袖さへ濡しました、然るに此の一家愁嘆の折節青々たり西の空より俄かに紫雲驟驟きました、見るく空中一面に蔽ひ劉曉たる音楽さへに聞えました、靈香薫じて三尊二十五菩薩赫々たる聖衆を引き連れて、最と間近くまで來迎致されました、中々に奇しく妙へなる瑞相にて實に疑ひもなく新左衛門は、西方十萬億士の極樂世界に往生して、紅蓮の臺にして到らんとせることは明さまに知られたことであ

りました、左れば人も此の體を見て皆な喜びの涙をさへも浮べられました、中にも片足棺中に投じたる老人又は物慣れの若輩などは、何の思慮もなく今しも眼前面に此の體を見て、天を仰ぎ地に俯して共に死なんとぞ狂ひましたが、此時嫡子新右衛門は父新左衛門の膝下に寄り添ひ、涙を袖に包みながらに申すやうは、子「ア、御覽候へ難有くも彼の瑞相、實に頼母しき次第にて父上の極樂往生亦疑ひなきことでござる」と斯く聞くより新左衛門は眠れる眼を潤と見開き、我子をハタと睨みて云ふには、新「人として弓馬の家に生れし者の例令安養淨土に到り、九品蓮臺に座すとても何とか弓箭を忘れて可ならんや、汝其れ書院の床に立てたる重藤の弓に箭を



添へて持ち來られよ』と命じますれば聞く人皆な驚かぬはなきことで、這  
は如何にすることかと思つてありませうれば、其うち嫡子新右衛門心ならずも  
弓箭を取揃へて、父新左衛門の前に持ち來たりませうれば新左衛門は、病體  
にも弓箭を取りては一騎當千、懸て弓に箭を彎ひ満月に引きしほり、霎時  
狂を擬して居りましたが、ヤと掛聲諸共兵ときつて放ちませうれば、其箭は  
誤たず三體の中尊光輝を放つて立ち給ふ、阿彌陀の胸板を射貫きましたれ  
ば、傍へに見て居ましたる人々皆なアツと思ふ間に、彼の紫雲の靉靄るも  
のは諸々の聖聚と見えましたが、其も皆な忽ち消え失せて、陰も留めずなく  
なりました餘り不思議のことに、能くく穿鑿しますれば豈に圖らんや這

は是れ處に久しく年經る貉の化けたるのであつたさうでござるが、眞に稀  
有なる次第にて新左衛門には終に一首の辭世を詠せられました、其句に  
生れぬる其曉きに死ぬれば

今日のゆふべは秋風を吹く

と斯様に辭世を仕られました、懸て寂寞の域に入られました、斯くて既  
に絶息致されましたれば、引導には一休をとて之れに頼まれましたるに、  
一休も日頃此の新左衛門とは意氣相投する別戀の中あひでもあり、旁々も  
て奇才子の死去なれば何が一節變はりたる引導をなさばやと、心中窃か  
に思ひを挿ひて居りましたが、懸て埋葬の時刻ともなり新左衛門が亡骸



を、輿に乗せて大徳寺に來られましたれば、一体には美々しき装ひをなし  
て立出で給ひまして、新左衛門が乗つたる籠を敲かれましたるに、噫な不  
思議や既に死したと思つた新左衛門、棺中にありて聲高々と一首の歌を一  
休に詠みかけました、其歌に

獨り來て獨り歸るも我れなるを

道教へんといふぞ可笑しき

と其詞の未だ終らざるに一休直ちに返歌して云ふには

獨り來て獨り歸るも迷ひなり

來らず去らぬ道を教へん

との宣ひますれば新左衛門も實にもと思はれましたか、其後には音もせず  
全く成佛致されました、此の趣きを傳へ聞へたる世間の人は、皆な一休の  
即妙の返歌に感じ、誠に人間ならぬ活菩薩なりと云合ひました。

### 難問の返報

或處に最とこびたる一人の男が、一日一休の許へ不圖來ら  
れまして手に一羽の雀を持ち、之を一休に示して云ふには、『如何に御坊  
よ、此の掌中の雀は生であるか將た死であるか』『無である』と斯様に答  
へますると、彼の者此の一答に閉口したと見えまして、復た一言の言葉も



なく其儘逃ぐるが如く立去られました。如何さま彼の者の心たくみは若しも一休が生なりと云は、直ちに之を握り殺さんと致せることにて、若し又死なりと云は、直ちに放つて遣ふと、兩天秤を掛けたることでありませ、其れ故えに一休は孰れとも就かず、唯だ無と答へたこととあります。其後ち一休彼れが家に行かれ、門口の敷居を踏踏ぎまして、「是りや〜亭主々々今我れ此の敷居を出づるか入るか、之を言ひ當て、見られよ」と申しますれば亭主は南無三寶這は前日の返報かと、胸にギツクリ應へ何とも言はず唯だ手を拍つて莞爾として笑れました。如何さま閉口したこと、見えます。

一休活論理推測

象の牙を見ますれば未だ其全體を見ませぬとも、是れ必ず牛より大なるものであると云ふことが知られます、又虎の尾を見ますれば未だ其全體を見ませぬとも、是れ必ず狸より大なるものであると云ふことが知られます、是れ所謂一節見はれて百節を知ると云ふもので、爰に上京に糸屋由右衛門と云ふ者がありました。豫々一休の頓才人の問いづることにて對し之れに答ふるの迅速なるは古今無双の由承り居り、何時ぞは一たび對面して之を試みて遣らうと、心中竊かに思ひ設けて居りましたるに、折節一



休は檀那歸りと見えまして途中にて不圖しも邂逅ましたれば、由右衛門は  
 這は幸ひのことゝ一休に向つて申しまするやうは、由倍ても和尚殿には一  
 段の處にて御目にかゝり、序でながら御願ひ申したきは餘の儀にも候へま  
 せぬが、明日少し志す日の差當りますれば和尚様へ、聊か御齋進せたく存  
 じますれば、御足勞ながら御來臨下されたく願ひます、就きましては豫々  
 御寺へ伺候致して御願ひ申したくと存じました所、今此處にて御目にかゝ  
 りしこそ幸ひ略儀ながら御願ひ申す儀でござります、一「ハ、ア左様でござ  
 るか其れ、何より奇特のこととでござる、委細承知しました而て又其宿所は  
 何れにてありまするか、由左ればでござる宿所は外にてもござりませぬ、

室町通にて御存じの處でござります、參られますれば直様お別りになりま  
 す』と申し棄てたるまゝ、由右衛門は直ちに別れて立ち去られましたか、  
 此時由右衛門は未だ其姓名をも告げぬこととでありましたれば、大概のもの  
 なれば何とも判断が付かぬこととでありまするが、頓才の一休は直ちに合點  
 せられて點頭れましたが翌日になりますると、早朝より大徳寺を立出でら  
 れまして室町通へと差掛りましたが、固より何所と約束したれ目標のある  
 にてもござりませぬが、或る一軒の店先に何とも別かず小さき鉦の釣り下  
 げてある家がありました、是に於て一休は忽ち判断して是れは此方と云ふ  
 ことであらうと、點頭きまして其家の内へ這入られますると又何とも別か



す、家の入口に犬の皮が敷いてありました、一休又之れをも合點致されま  
 して奥へ通られますれば、由右衛門出で來られて「由借てく今日道路  
 も悪しきに御太儀でござりました、定めて御足も汚れ候こととでござりませ  
 う、洗足を差上申しませう」「否や、只今カハを越えて參られし程に、  
 敢て其れには及よばぬこととでござる」と申せば由右衛門は、心中大いに打  
 ち驚かれました頃才の和尚に一本やられたりと、思ふ心は外にも出さず其  
 場の挨拶も濟みますれば暫らくにして由右衛門は、膳部を調へて出されま  
 すれば一休は「然らば頂戴仕る」と申して飯より吸物と順々に蓋を取  
 つて見ますると、是れはしたり何れも皆な悉く小糠でござりますれば、左

あらぬ體にて居りますると由右衛門座敷へ出で來られまして「由何はなく  
 とも徐々と御あがり下れたし」と申しますれば一休直ちに「是れはく  
 今日御志は三七日でござるか」と申しますれば、由右衛門愈々驚嘆し  
 て感ぜられました、此時一休は座を立たんと致しますれば由右衛門は猶ほ  
 も試みんものと、錢百文を取出されまして一休に向つて申すには「由今日  
 は段々との御讀經難き仕合にござります、左れば此の百文は最と僅かな  
 る志に今日の布施として差上參らせます程に、和尚殿には是れへ身を  
 寄せず其方に居ながら御請けあられます」と難題を申しかけますれば一休  
 は聞きも終らず直ちに答へて云ふやうは「其御志委細心得ました、左



すれば拙僧は此方にて請け申します程に、卿は亦身を我れに寄せず又投  
げずして賜はりたし』と申しますれば由右衛門は驚嘆極りて言句なく、霎  
時にして申さるゝやうは、由借てく和尙殿は聞きしに優る御頓才の御即  
答には、殆々敬服いたしました、小生の如き復た再び開く口だにござりま  
せぬ』と終に大いに閉口して全く平伏せられましたさうでござります。

### 赤飯手形の通行

或時のことでござりました一休和尚親しき在家へ参られましたるに、折  
節此の家へ赤飯の到来物がある由にて、之を一休に進せられました一休は

一『是れは何よりの好物 忝なきことでござる、然らば違慮なく早速頂戴仕  
るとて、何の會釋もあらばこそ己れ手づから握りては食し堅めては食し、  
夥しく食されました此の家の主人は此の體を見て、豫て一休の答話を試  
みんと思ふ折りからでござりましたれば、是れ能きときであると一休に向  
つて云ふには、〇『是れは和尙殿には赤飯でござれば、容易くは胸を通るま  
じきと存せられまするに、そのやうにしたものに食せられまするは如何な  
ることにてござりまするか』と問はれまするも一休和尚には毫しも耳にも  
入れませんで、無暗と引續けて食します程に主人は頻りに焦立まして、  
和尙殿には其やうに無言にて食さるゝは、如何にとり心得難きことでござ



「何とか一句仕られたし、イデ早う疾々と責掛けました。が此時一休には漸く答へて申しまするには、「否や何に決して大事なことでござる、是れ見られませよ。此通りせき飯とござれば一々握り固めて手形を付けて通りまする程に、何程にても差支なく皆サツサと通られます」と云ひも敢ず又々之を食しますれば主人は大いに驚かれました。閉口し、後は一言の言葉もなかつたさうでござります。」

濁酒和歌の問答

是れは一休和尚の山居して居る時のこととでござりましたが、此頃親しく

出入する者或る一年の冬寒中見舞にとて、一休の庵室に参られました。折節和尚には寒さ凌ぎにとて濁酒を飲んで居られましたが、彼の者此の體を見て一首詠まれまするは

山居して心すますと聞きぬるに

濁酒をばいかで飲むらん

と斯くなん打ち戯れますれば一休も透さず

山居して飲むべきものを濁酒

とても浮世に住む身でもなし

と仕られますれば彼の者も感に入りて歸へられました。さうでござります。



化物は飄々の間に在り

或人<sup>あるひと</sup>一休<sup>いつしゅう</sup>に問<sup>と</sup>ふて申<sup>まを</sup>しまするは ○「ナント和尚<sup>をせうさま</sup>様御<sup>おん</sup>尋<sup>たづね</sup>申<sup>まを</sup>升<sup>あが</sup>が化物<sup>はげもの</sup>と云<sup>い</sup>ふものは真<sup>まこと</sup>に之<sup>これ</sup>有<sup>あ</sup>るものでござりまするか、若<sup>も</sup>し又<sup>また</sup>之<sup>これ</sup>ありとしますれば果<sup>はた</sup>して世<sup>よ</sup>に云<sup>い</sup>ふが如<sup>ごと</sup>き不思議<sup>ふしぎ</sup>なものでござりまするか、アハレ和尚<sup>をせうさま</sup>様の知<sup>ち</sup>識<sup>しき</sup>で御<sup>おん</sup>諭<sup>ごんご</sup>し下<sup>くだ</sup>さりませ」と望<sup>のぞ</sup>まれましたるに、一休<sup>いつしゅう</sup>は何<sup>なん</sup>とも別<sup>わか</sup>かず、「嗚呼<sup>あゝ</sup>呼<sup>あ</sup>化<sup>け</sup>物<sup>ぶつ</sup>であるか其<sup>そ</sup>れなれば別<sup>べつ</sup>段<sup>だん</sup>六<sup>むく</sup>ヶ敷<sup>しき</sup>いことでもない、唯<sup>ただ</sup>だ中<sup>まん</sup>間<sup>なか</sup>に飄<sup>ぶら</sup>々<sup>く</sup>である」と斯<sup>か</sup>様<sup>やう</sup>に答<sup>こた</sup>へられましたしてござる、彼<sup>か</sup>の者<sup>もの</sup>は之<sup>これ</sup>を聞<sup>き</sup>いて大<sup>おほ</sup>いに腹<sup>はら</sup>を立<sup>た</sup>て、申<sup>まを</sup>すやうは ○「是<sup>こゝ</sup>れはしたり一休<sup>いつしゅう</sup>禪<sup>ぜん</sup>師<sup>じ</sup>殿<sup>でん</sup>とも覺<sup>おぼ</sup>え申<sup>まを</sup>さぬことを宣<sup>のたま</sup>はす

ることではござりませぬか、凡<sup>およ</sup>そ人<sup>ひと</sup>の物<sup>もの</sup>を問<sup>と</sup>ふに之<sup>これ</sup>に答<sup>こた</sup>ふるには、其<sup>その</sup>禮<sup>れい</sup>法<sup>ぽう</sup>がござらふに何<sup>なん</sup>とも別<sup>わか</sup>かず唯<sup>ただ</sup>だ中<sup>まん</sup>間<sup>なか</sup>に飄<sup>ぶら</sup>々<sup>く</sup>と云<sup>い</sup>ふ御<sup>ご</sup>挨拶<sup>あいさつ</sup>は、無<sup>ぶ</sup>禮<sup>れい</sup>も程<sup>ほど</sup>こそあれ餘<sup>あま</sup>りとは云<sup>い</sup>へば無<sup>ぶ</sup>禮<sup>れい</sup>の挨拶<sup>あいさつ</sup>心得<sup>こころえ</sup>ぬことにこそ、這<sup>こゝ</sup>は人<sup>ひと</sup>を撈<sup>な</sup>ると云<sup>い</sup>ふものにて出<sup>しゅつ</sup>家<sup>け</sup>にはチト似<sup>に</sup>合<sup>あ</sup>はしからぬことでござる、去<sup>い</sup>來<sup>ざい</sup>此<sup>こゝ</sup>の上<sup>うへ</sup>は是<sup>ぜ</sup>非<sup>ひ</sup>に其<sup>その</sup>仔<sup>し</sup>細<sup>さい</sup>を承<sup>うけたまは</sup>りたうござる、若<sup>も</sup>し其<sup>その</sup>説<sup>せつ</sup>なくば禪<sup>ぜん</sup>師<sup>じ</sup>とは申<sup>まを</sup>すまじきことで又<sup>また</sup>他人<sup>たにん</sup>にも和<sup>わ</sup>尙<sup>せう</sup>などとは申<sup>まを</sup>させまじきことでござる、誚<sup>す</sup>訪<sup>ほう</sup>八<sup>まん</sup>幡<sup>ばん</sup>も御<sup>ご</sup>示<sup>じ</sup>現<sup>げん</sup>あられ給<sup>たま</sup>はれよ」と烈<sup>ほ</sup>火<sup>の</sup>の如<sup>ごと</sup>くなりて怒<sup>いか</sup>られますれば、一休<sup>いつしゅう</sup>敢<sup>あ</sup>て騒<sup>さわ</sup>ぐの氣<sup>け</sup>色<sup>しき</sup>なく徐<sup>おし</sup>ろに申<sup>まを</sup>されますやうは、「嗚呼<sup>あゝ</sup>呼<sup>あ</sup>化<sup>け</sup>物<sup>ぶつ</sup>でも其<sup>その</sup>方<sup>なた</sup>は短<sup>たん</sup>氣<sup>き</sup>な男<sup>をとこ</sup>にてはござらぬか、斯<sup>か</sup>う怒<sup>いか</sup>られて見<sup>み</sup>ては其<sup>その</sup>方<sup>なた</sup>のやうなる者<sup>もの</sup>とは一<sup>かり</sup>寸<sup>そう</sup>の談<sup>だん</sup>話<sup>わ</sup>もならぬこと



である。其方能く考へてお見やれよ世に幽靈化物など云ふものは、有りと思へば有ることであるが無いと思へば又無いことである、其有りと云ふも無しと云ふも總て我が一心の趣きやうで、不思議と云ふも亦同じことでもりと思へば有り無しと想へば亦無いことである。實はと申せば化物不思議は有るにてもなく無きにてもなく、其有ると無きとの中間の飄々である、我れ是れもて前きに其方が化物不思議と云ふものは、有るか無きかとの問ひに對し中間の廳々であると答へたることである、ナント是れは即ち中間の廳々ではござらぬか』と示されますれば、彼の者は横手を拍ッて大に感ぜられまして ○『成程和尚様の御了簡は別である』と前きの過言を謝して歸られ

たさうでござる、何さま面白き論しでござります。

一休禪師弟子を教ふるの妙道

茲に一休の檀那に一人至極愚直なる者がありまして、折々は大徳寺に参りて一休の物語りなどを聞るゝことでありましたが、或時のこととござりました一人の小兒を連れて一休の草庵に参られて申さるゝやうは ○『豫て法語に承りまするには、一子が出家すれば九族が天に登るとか聞き及ばれましたが、就ては今此處に連れ参りましたるは獨り子でござりますが、何うぞ此の小兒を御弟子になし下されたし』と望まれましたるに、一休は



早速承知致されまして、「ハ、ア左様でござるか、其れは何にしても御奇  
特なこと委細承知してござる」と直様縁の黒髪をクリ〜と剃り落されま  
して、最と愛らしき小坊主と爲されましたが、一休には御手をもて其剃立て  
の坊主天窓を、サラリ〜と撫で廻されましたれば其親は、這は何ぞ必ず  
難有き御引導にてもあらうと耳を清まして待ッて居りますると、聽て一休  
和尚は妙な聲を發して、「陰囊になれ〜牛の陰囊になれ〜」と三遍ま  
で繰返して宣ひますれば、之を聽き居たる親は驚くまいか大いに打ち驚か  
れましたが、遂に大いに腹を立てられて云ふには、「是れは借て和尚殿に  
は途方もないことを申さるゝものではござらぬか、好し假令佛にまでは得

なられませぬとも、責めては菩薩になれかしとでも申さるゝことかと思ひ  
ましたるに、案外にも牛の陰囊になれとは開放題も亦太甚しいこととござ  
る、抑も牛の陰囊になッて如何なる利益がござるにや、心得ぬこととござ  
る」と頻りに一休を白眼みつけて居られますれば一休は、此の體を見て莞  
爾として笑はれましたが借て申さるゝやうは、「末法の出家は兎角に行ひ  
難くして落ち易きことであるが、之れに反して彼の牛の陰囊と云ふものは  
常にブラ〜として、動もすれば落ちさうに見ゆるが借て一生落ちたと云  
ふ話もないことである、故に出家も亦此の牛の陰囊になれと申したること  
である、因ッて今此の小坊に對し牛の陰囊になれと申したることである、



果して合點が參られましたか』と仰せられますれば、彼の檀那には大いに感ぜられて、『偕ては委しく承つて見れば面白くも又有難きこととてござる此の上は何分宜しく侍み上げます』とて其儘一子を托して歸られましたてござる。

釋迦達摩の故郷に一休禮拜す

一休和尚は随分とばけた人物で能くも悟りを開いたこととてござるが、或時のこととてござりました一休和尚偶々或る川邊を通られましたるに、折節夏のこととて一人の婦人が赤裸々になつて居られましたか、一休は不圖しも

之を見て何思ひましたか彼の裸體婦人の陰部に向つて、最町噺にも一度ならず二度ならず三度までも禮拜して通られましたか、此時又遙か傍らに此の體を見て居たる人々口々にさゝやきまするやうは、『夫れ彼の僧は狂氣して彼れが出家の身として女の皮膚を見て、而かも陰部に向ひ三度までも禮拜して行かるゝは如何なる事であるか、如何さま狂氣のこととてあらうか何は兎もあれ最と珍しきこととてあれば、疾く追ひ近づきて其仔細を尋ねて見やうではないか』△『イヤ其れは面白いことである』と皆な人々走り行き、應て追付いて彼の墨染の袖を引かれて問はれまするやうは、『偕ても御坊は奇妙なる人である、只今女の皮膚を見て最と町噺に禮拜したるは



這は抑も如何なる所以にてござるか、佛道修行に斯ることのありまするにや、如何とも不審に候まゝ是れまで追ひ來つたことであるが、願くは其所以を聞きたいこととてござる』と迫りますれば一休は、有無の答辭もなく唯だ何となく

女をば法の御くらといふぞ實に

釋迦も達摩もひよいくと生る

と斯くなん口吟せられたるまゝ疾くく行き去られました、左れば跡に残りし人々は口々に評し合ふやうは、〇彼れは抑も何人であるか、左りとは又珍らしき和歌を口吟せらるゝもの哉』と申しまするうち一人會て之を見

知る人があつて、夫れこそ紫野大徳寺の一休禪師であると申されますれば人々皆な愕然として大いに打ち驚かれ、如何さま一休でござらう、一休ならで斯ること云ふ者ありとしも覺えぬことである、實に殊勝のことで婦人の胎内よりは貴人高位の人も又は諸宗高僧もひよいくと出でらるゝことである、之を思召して禮拜されたるは、原因を忘れぬとや申しませうか、如何さまにも敬服なことであると皆な深く感心せられて退散せられたさうでござる

一休の變化天淵月鼈の相違



茲に都に一人の金満家がござりましたが、最と大事の葬に際しまして、導師には如何なる人をか請すべきと種々と家内の相談を致されましたところ、當時名高き聖僧知識も數多くあることであるが、中にも紫野大徳寺の一休和尚に若くはないことであると内談既に定つた上は佛事は愈々明日のことであれば、疾く人を遣はせとて早速人を以て一休を頼みに遣はせましたるに、折節一休は庵室の墨埃を拂ひ庭など掃除してあられましたが、固より人に隔てのない御坊なれば心安く領承致されました、斯くて彼の使ひの者が歸られて後ち一休如何思召されましたか嚮きに使ひの者の口先として一寸金満家の由承りましたれば急に賤しくも淺間しき乞食に身をや

つされまして、手足には煤を塗り付け腐菰を身に纏ひられまして宛然海蕩の中から這出でたやうになつてやを杖に扶けられて、彼の某となん云へる金満長者の門口に立たれ世の乞食の罵る如くに、「何うぞはや御佛事の御供養に御慈悲の御志を下され」と繰返々々申されまするに此時しも他の二三人の乞食も亦來りましてとり／＼に御施行下されとせがまれましたるに、此の家の主人邪見にも腹を立てられまして、「主醜き奴輩おッ拂へ」と下知致されましたが其言葉の下より二三人の壯丁手に手に棒をおッ取ツて走り出で、「此供養は明日のことなるに、早くも今日來ておめくとは何事である、去來此の棒を喰ツて行け」と片端よりおッ拂はんと致しますれば、



足早き乞食共は皆な雲を霞と逃げ去りましたるに、跡に残りしは「一休只だ一人、足の遅さが爲め然慘や散々に打ちなぐられ、剩へ壯丁等の土足で踏倒されましたが漸く辛き生命を拾ひ喘へぎく、呆々の體にて紫野まで逃げ歸られましたが一休心中窃かに左りとは餘りと云へば餘りに無慈悲のことであると思はれましたるに、聽て其日も暮れ果て明日にもなりますれば、一休は昨日の状態に引替へたる今日の服装は俄かに天地一變致され新たに沐浴を致されました大徳寺に藏する法衣を振はれ美を盡して着されましたが、七丈の御袈裟は裾長に引き掛けられ金襴交りに取装はれ、迄邊赫灼まで天晴盛装の出立にて、彼の金満家の許へ到られますれば、檀那大いに打

ち喜ばれました去來是れへと佛前へ請しましたが、一休如何してか謙遜して進み給はず宣ひまするやうは「否や其れまでは参りますまい、愚僧は此所にて事足り申すことである」と石臼の如く蟻まらして、屍に根が生へましたか少しも揺動させぬゆる、旦那は頻りと問へられまして、且是れは抑も和尚殿には何事にておはしまするか、アラ忌はしや此所は下郎の廻にてござる、去來疾く此方へ通られ候へ」と手を取つて引かれますれば一休申しまするやうは「左様強ひて御齋賜ふとあらば、願くは此の法衣に料供賜はりたきことで、愚僧が賜はるべき理由はなきこととござる」とて一首の狂歌を詠まれましたが其狂歌に



わうばくの三十棒を當てられて  
身に晴れ着たる蟬の脱け空

と斯くなん仕られまして、其法衣を脱ぎ棄て、歸へられました、是れは昨日の乞食も今日の愚僧と同じ火と水で作られし一人の人間であるに、昨日は棒を喰へ今日は齋を賜はると云ふこと、是れ偏へに此の法衣の彩色が光るからであるとの意でござりますが、世の中の事は大概是んなものでござります。

一休秘密の玉手箱を開く

一休は大慈大悲の江海心を有されたこととでござりましたが、茲に都に口痺の妙薬を覚えて最と秘密に致されて居りました、此事遂に一休和尚の聞く所となられました、如何にもして聞きたきことであると思召されまして、或る一日の事其家に尋ね行かれ、主人に面會して申されますやうは「偕て愚僧のお尋ね申上げましたるは餘の儀にてもござりませぬが、承はりますれば、此の家には口痺の妙薬がござる由、其れゆる遙々是れまでは尋ね参りし次第であります、アハレ願くは此の愚僧に御相傳下されたく偏へに懇望奉りますと述べますれば、主人は委細承はッて云ふやうは、是れは亦何かと思へば彼の妙薬のこととでござるか、此の妙薬は我家



代々一子相傳の秘法にてござれば、他に漏らさんことは思ひも寄らぬこと  
 でござるが、御僧とござらばさうも否み難きことにてあれば、深き御執心  
 にてわたらせ給は、教へ申さん程に口傳せまじき趣き起請を書せられよ』  
 と一休は之を聞いて更らに申しまするやうは、「誓文とありては我身の一  
 世一代のことにて中々に重きことにてござるが、愚僧に教へて下さるとな  
 らば、委細心得てござる、と墨黒々と認めて遣はされましたが、左らばと  
 て主人も其妙薬の秘法を授けられました、一休は能くも之を覚えて歸られ  
 ましたが、我が庵室に歸りて後ち冷笑ツて獨り自ら謂ツて言ひまするやう  
 は、嗚呼斯る人の疾病に薬となるものを秘藏して獨りのみ、其効能に與か

らんとするは、扱てく慈悲の薄きことである、若し之を世間に公にする  
 ならば、开は必らず大いなる効益を與ふることである、這は寧ろ其人一人  
 の誓文に背くとも世上の爲めとしならば、我が望みは足れることである、  
 左らば札を書き立て、知らせんと、懸て左の如く書いて立られました。  
 一口痺の薬の事 若し口痺を病む者あらば必ず密柑の核を黒焼にして  
 飲ひべし治ること速かにして再び起る事なし是れ奇代の妙薬なり  
 と斯様に明々地に打ちまけて世間へ知らせけると、之を聞いたる傳授者腹  
 立つまいか腹立つまいものか、口を尖らし肩を聳やかし、烈火の如くなつ  
 て怒られ、早紫野大徳寺へ行かれ、一休和尚を尋ね出して云ふやうは○』



如何に御坊と御坊は破戒無慚の僧にてはござらぬか、何とて堅く誓言を立て口外せまじと誓はれたる、我が大事の大事の秘薬を漏らせしぞ、剩へ高札まで立てられて萬人の目に觸るゝことは是れ抑も如何なる所以にてあるか、言語同断の至りである如何に申解あるか如何に〜』と責め付けますれば、差しもの一休も彼の人の勢ひが烈しければ這は取つていも喰るゝことかと思ひましたが、有繋は一休で少しも驚かず左あらぬ體にて申すやうは、『アラ事々しや何事を申さるゝかと思へば彼の妙薬の事でござるか、就ては起請を書いたるも誠であるが、又札〜立てしも慥かに我が爲せし業に相違ないこととでござる、去りながら彼の起請文に口傳せまじと趣きを書

きたれが、开は堅く守りて何人にも口づから傳へしことは知えてせぬことであるが、併し其起請に札を立てじとは書かず此の札の趣きに於ては誓し覺え更ら〜なければ札を書て立てたるにてござる、是れ我が誤ちか否や〜決して我が誤ちにてはない、我れは少しも起請に背きしことなければ決して神佛の罰も恐ろしくはないことである』と空嘯いて居られますれば彼の者怒氣心頭に達し掴みもかゝらんとしましたが一休の申す言理の當然でありますれば、如何ともなし難く遂に茫然として立ち歸へられましたか如何さま一休に一盃はせられたることとでござる。



觀面の教誨

或日の事でありました、早川治郎太夫と申す武士、而かも少年血氣の勢ひをもて、暴論をも吐く者一休の庵に参られて云ふやうは「治」和尚殿よ、人は殺して善きものであるか、將た悪しきものであるか、开は其趣意にと由ることであらうと思はれます、故に若し殺すの理なければ好し假令一人たりとも殺してはならぬことで、之を殺さば惡逆無道の名は得こそ免かれぬことであるが、併し之を殺して差支なき道理あらば好し假令千萬人を屠り殺しまするとも敢て怪しうはないことと云ふらうと思はれますが和尚殿

此の理如何でござるか』とあれば一休之れを聞いて云ふやうは「是れは亦何かと思へば殺生のことであるか、既に殺生とありては御佛も五戒の一つに置かれて深く戒められたことで、抑も殺生と云ふものは諸々の罪の根本であれば、其之を殺すの道理があらうとなからうと其れには關係らず何れとも之を殺さざるの仁あるに若くはないことである、又此の世の中に人を殺して善いと云ふ道理のあらう筈もないことである、凡そ生きとし生けるもの、其生命を惜まぬはないことで好しや蚤や虱又は蟻螻の如き微々昆蟲と雖ども其生命の貴き心は敢て人と異なることではないことであれば、先づくもて生物は殺さぬが宜しいことであると最と懇ろに説いて聞かせま



したが、彼の男未だ中々行點せず更らに云ひまするやうは、治「否や、うさう區別のないは却て悪いこと斯くては牛の糞も味噌と一所になつてしまふことのでござる、若し之を殺しても善き修理のあらば人を殺すも決して差支のないことである、例へば主人の命もあり或は知己朋友等に頼まれて、是非なく人を殺すこともあり、此等の場合に於て若しも人を殺すのが悪くば其人に命じ人を頼みたる者こそ罪もあれ咎もあれ我れは全く罪咎はないことであると利口振りにも鼻うごめかして申しますれば、一休聞きも敢ず其言葉の未だ終らざるに、「其方彼の柳に最とく雪の積りて枝も重げにて、無心の樹とは云へ甚だ可愛想と見えれば、一寸行いて雪を拂ひ下

さるまじくや』と依頼すれば、彼の男、「委細かしこまつてござる」と直ちにやをら立ち行き柳の小蔭に立寄ると見えましたが、柳の木に手を掛け二振り三振り之を振つて見ましたるに、這は抑も如何に其落る雪は班々として、衣服の上に懸り孔明ならぬ身の遽かに鶴の裳を着され襟下などに這入る、雪は最とく物冷かにして身に粟を生じましたれば、是れはと思ひ袖打ち拂ひ襟掻き落しなどして居りますると、一休和尚透さず申しますやうは、「其方何とて雪を拂らはるゝにや其雪は素と拙僧が依頼申したるなれば、拙僧にこそ懸るべきに左はなく却て其方に掛れるは、抑も如何なる所以であるか、這は亦一つの不審である」と云へば、彼の男ハタと行當り



復た兎斯の言葉もなく是れまで動もすれば殺生を事としましたが、是れより殺生の事もフツと止みました、如何さま一休和尚觀面の教誨に服して斯くは善人になつたことでござります。

### 一休の妙讚他僧を驚かす

茲に一休和尚と均しき沙門のござりましたが、聊か繪を畫くことも拙からで、自ら我が畫像を畫き寫されましたが、己が慾目に如何にも善く出来たことである、と最と嬉しく思はれ、或る一日の事一休の庵室に持ち行きで見せばやと思ひ、急ぎ紫野に行かれ、一休に對面して之を見せました、

定めて一休も之を見て感心することであらうと思つて居りましたるに、案に相違して一休一目之を見ると、「噫な醜しや」と言ひつゝ目を閉ぢて大いに嘲けりますれば、彼の僧大いに腹を立て、「是れはしたり一休和尚とも覺え申さぬことではござらぬか、何等の言葉もなく唯た嘲み笑ふとは如何にも無禮のことではござらぬか」と一休之を聞いて兎斯の挨拶もなく彼の畫僧を取つて庭の上に投げ付け懸て庭草履を穿ち行かれましたが、散々に之を蹂躪られましたして、揚句の果てに一筆サラ〜と書かれました文句

世を捨て、形を捨てず鬚髪を切りて煩腦を切らず假りに畫像を書きて



己が悪業をかげつけ置く畫像大きな迷惑なり  
と墨黒々と賛を書いて渡されますれば、彼の沙門も熟々と感じた見えま  
して臆て懐中してスゴくと歸へられました。

### 虎の威を假る狐の智慧

これは伊蘇普物語などにもある話であります、一休の話にも之れあ  
り見えまして、長く話し傳へられてあります、或日の事一人不圖しも  
一休の草庵へ尋ね来られました云ふやうは ○我等ことは全くの無學文盲  
でござらば、少し六ヶ敷きことは聞いても耳に留り居らず何方にか煙の如

く消失してしまふこととでござれば、何かなチト面白く可笑しく耳の底に留  
り居りさうなお話もござらば一つ話して下さりませ』と請ひますれば一休  
申すには 『ハ、ア左様でござるか、开は亦最と易きことである、昔し唐  
土にて一日虎が勢ひ猛く狐を追掛け到々之を追詰め將さに利爪を引つ掛け  
之を啖はんと致しますると、此時狐は忽ち一計を廻らし虎に向つて云ふや  
うはオイ、虎公々々我れに對して無禮をするなよ先づ能く聞かれよ今日  
より遽かに天命が下つて乃公を百獸の王になれと最と嚴かなる仰付けがあ  
つたことである、故に汝今日よりは却て我が命に服すべきことであるに、  
若しも我れに對して無禮もあらば忽ち天罰當り汝が命も滅することである



若し猶ほ之を疑は、汝我が尻より附いて供して來り見よ、諸々の獸我れを見て必ず恐れおのゝき逃げ隠るゝことである、如何に虎公よ我が供して來るつもりはないか』と最と横柄にも一生の膽力を振つて勇ましくも言ひ放たれますれば、虎は是れは不思議なことであると思ひ左らば行かうよとて狐の尻に附いてノソノソ行きますると成程奇妙や諸々の獸今しも此の狐の先きに立つて來るを見て皆な散りゝに逃げ隠れ恐れおのゝき、平れ伏してありますれば、虎は誠に諸々の獸が狐に恐れを爲すと思ひ、偕ても不思議のことである、と天命を重んじ是れより狐に随つたさうでござるが、是れは敢て諸々の獸が狐を恐れたのではない、尻から來る虎を怖れたのでござる、而て亦此の狐は世に最も多きものでござれば其方なども化されぬやう用心あるべきことである』との物語に彼の者も亦面白がりて立歸られました。

幽靈問答一休三寸舌頭に釋迦を弄す

一日或人一休に問ふて申するやうは ○聞く所に據れば人は死して體はなくなり果つるとも魂は此の世に留る由でござるが、若しも左ることならば假令其體はなくとも魂にあらば其人は其儘此の娑婆に残り居て物語りなどもあるべき筈でござる何故なれば人として魂は其本領でござれば此の



本領の遺つたる人の物語りなどあるべきは固より其所でござる、左るに魂の尋常の物語りなど聞いたことなきは一つの不思議でござる、且つ又一方より考へて見ますると、人は地獄或は極樂へ行いて來世の苦樂があると云ふが、若しも魂が行かねば其苦樂も感ぜぬことでござらう、體は葬りたる墓地に何時までもあるものにて嘗て地獄極樂へ行いたと云ふ、話も聞かぬことである、左すれば地獨極樂へ行くと云ふは魂の謂ひで體の謂ひではござらぬ、然らば此の娑婆に魂の留り居る筈もないことである、若し猶ほ：婆に留り居るとしますれば、开は魂が二つなければならぬことでござる、一人の魂が二つあらう筈もないことである、既に一つとすれば又疑ひある

ことでござる、开は亦何故と申すに彼の極樂に行つて佛に成つたる者は其極樂の蓮の臺の快樂が數々多くて此の塵埃の娑婆に來やうなどは露毛程も思はぬこと娑婆歸りなどは全く打ち忘れてしまふことでござりませう、又彼の地獄へ行さし事などは日夜の呵責に魂の骨身は碎かれ手足は疲れ果て中々此の娑婆に來る間隙などはなきことでござらうに世に幽靈などゝて死したる者の來りて様々の事を言ひ並べて怨ずる等の事を承はるが、這は抑も如何なるゆゑにや和尚殿の知識で御示し下され』と云へば一休之を聞いて申すやうは『左れば其事にて候へ我れ未だ死して見ねば其事は委しくも存じ申さぬことでござる、我等も若き時ト談議など聞きたること



の侍るが真か偽か知らぬ魂と云ふものがあつて佛とも成り鬼とも成るげに候が、其くせものが閻魔王とやらんの前にて、公事奉行の手に渡り娑婆にて作りし罪を鐵とか銅とかの帳とやらんに附けて置き之を午頭馬頭等の獄卒どもの鬼に見せて誰れくは是れくの犯罪であれば、急ぎ此の帳簿に由りて呵責せよと云ふ命が下るとか申すことで是れから赤青等色々の鬼共が之を受取りて様々の責めに逢はすのであるさうでがなござる、而て其娑婆にて犯せし數々の罪ほど之を責ると云のでござるが、开は亦何うして之を責むるか中々に責め盡されやうとは思はざることである、先づ聞き給はれよ、拙僧此頃一首遣つて除けました、其狂歌は斯様でござる、

作り置く罪が須彌はどあるならば

閻魔の帳に附けどころなし

と斯う作つた狂歌で見れば鬼と云ふ者も實は鈍物である釋迦が一の經文は皆な嘘八百をも打越え嘘八萬の皮をもてかためたものでござる、而して有るかと云へば無しと説き又無きかと云へば有ると説く實に顔憎くの御坊でござる、拙僧又一首でござる

釋迦と云ふいたづら者が世に出で

多くの人を迷するかな

と斯く出来ましてござる如何でござるか云へば彼の者も亦大いに感に入



りましたさうでござる。如何さま能く悟り開ける問答でござります。

### 四百四病外貧病の治療

或所に能勢小作と云ふ者がありました。至つて狡猾なる男でありました。併し狡猾なる者も時に取れば困ることもあるもので、此の狡猾男或る年の十二月廿七八日と云ふ愈々暮れの押詰りになりて、是までの借金より追々と責め掛けられ如何にも首も廻ぬやうになりました。左れば此の小作如何にかして此の暮の火の車を廻し巧みに切つて除けたいと色々工夫して又た新たな借口を尋ね廻りましたが、何がさて暮の押詰りな

れば、何人も皆な同じく金の足の急がしき時でありましたれば、誰れあつて我れ貸さうと云ふ者もなく、有繋狡猾的小作も殆々困じ果て如何はせまじと兎さま斯さま考へて見ましたが善い考へも付かなんだことでありました。不圖しも思へば粟田口邊に彦八とて甚だ富み榮えたる町人のあることを思ひ付きましたれば、先づ粟田口の彦八を尋ねゆき、色々と言葉巧に身の不始末を悟らざるやう一時金借りたき趣きを述べましたるに此彦八と云へるは大の客齋家で己れが口に喰ふものです。勿體なくて思ふやうには食ふことも出来ぬもので親類にさへ一文も貸したことのなきものなれば況してや他の小作に金貸さうなどは夢にも思はれぬことで小作如何に口



説くとも彦八頑固として少しも取合ひもせぬゆゑ、小作も今は早や是れま  
でいあると、开が歸るさま一首の狂歌を口吟まれて行きました

寶ともならぬ財は彦八が

持ちたる金は我身さん玉

と斯くなん詠み遺されて歸へられました、此時或人小作に向つて云ふや  
うは○『是れ〜小作殿其やうにお困りならば何は兎もあれ一休和尚の許  
へ參つて願つて見たらば何うであるか、和尚は最と〜慈悲深き者であれ  
ば、少しは用立つても呉れることであらう、殊に其方の善き時は和尚の爲  
めに相應の用事も適へ置きたる事で、其方の事は和尚も亦蔭ながら懇ろに

仰せられて居たことでもあれば、先づ〜和尚の草庵へ行いて見るが宜し  
いことである』と頻りに勸むれば小作も亦『小成程其れは宜しからう、仰  
せに従ひ和尚の許へ行きて見ませう』とて應て和尚の許へ行かれました  
折り能く居合せて早速と對面されて先づ四方の話二つ三つ致されましたが  
小作は談話の潮合を見計ひまして云ふやうは『小如何に和尚様よ私が豫て  
の持病和尚様にも御存の事でござりませうが、此頃は又頻りに差起りまし  
たれば、醫者の診察を請ひましたるに、醫者の申すには這は是れ四百四病  
の外の病氣で醫書にも見えねば、我等の手際には行かぬことである、多分  
是れは貧の病と云ふもので其薬は金銀丸と云ふ丸薬を服すれば、即時に治



することであるが、其金銀丸は拙者の藥室にはなき程に他へ行き求められよと斯様に申されました、和尚様其妙藥御所持ならば一包御報謝與かりたいものでござるが如何でありますか、鬼の目に涙をハラハラとこぼして申されますれば一休之を聞いて云ふやうは「是れは亦何かと思へば四百病外の病氣でござるか、其疾病は年々二度ツ、起る者で先づ秋は七月の中旬に起りて遠國にまで流行ることである、次ぎは丁度十二月の今頃流行ることであるが、其方も亦其流行病に傳染されましたか、夫れはく偕て難儀のこととでござらう、就ては其妙藥愚僧澤山も所持致さぬが聊か所持もあれば進ませせう、とやをら身を起して奥に入り銀一包取出されまして、

开が上紙に養命補身丸と書いて與られました、一休更らに云やうは「其病氣若し再發のことありとも、其時は愚僧最早知り申さず疾く歸へられ候へとあれば小作莞爾として笑れつゝ推戴いて歸へられました。

正月元日一休齋體の年賀

一休と云ふ利尙も随分ひよろげた人物であります、抑も正月元日より二日三日と此の三日は元三と唱へて歳の始め月の始め日の始めでござれば、一天四海の人々其貴さも賤きも將た賢きも愚かなるものも皆な一盃の屠蘇をもて春を迎へ喜び祝はざるはなきこととでござる、誠に昨日に變りたるに



はござりますまいが、空天の氣色も何となう長閑にして霞わたりてござる  
 又家家の門には松竹を樹て井べ繩を引廻らしてござる、顧みますれば昨  
 日の夜半過ぐる頃までは人々の門など打ち叩かれました何事にかあらんと  
 思はるゝ程事々しくも足を空にして馳廻られましたるに一夜明けますれば  
 俄然天地一變して昨日にも替へたる人の心は皆な閑々として門に樹て井べ  
 たる松竹の間にはチウゝ雀の初物語りもあり、又童男の打揚る紙鳶は静  
 けき空氣の中に飄々として空に揚りてウナりますれば、女童の玩弄ぶ羽根  
 の音はカチリゝと耳に清み聞えて復た再び大晦日などの來べしとは露思  
 はぬことで、人々皆な野邊の小松に千代萬世を祝ひ初めまして今時死ぬる

としも知らず、萬の事を忌み恐れ朝の露に名利を貪り夕の陽に子孫を愛し  
 宛然螻蟻が茶臼を打廻る如くに同じ事をグルと五百七十年七曲りと祝  
 ひまして、世を秋風の心は露ちりほともなきは、總ての人の常態でござり  
 ます、或る一年の元日一休此の體を見て心甚だ可笑しく思召され、誠に  
 愚かなる朝顔の日蔭待つ間も盛り久しき花を眺め日影の青天に羽を振ひて  
 樂む間もなき世の中に、糞に箔塗る正月とは唯だ時の間の煙となることで  
 ある、左るを知らで野邊の小松に千代萬世を祝ひ壽くとは返すぐも愚か  
 なることである、イザヤ人々に一驚を喫せしめ呉んものと懸て墓地へ行い  
 て一つの髑髏を拾ひ來られました、之を程善き竹の先きに貫きまして而



かも正月元日の早朝に洛中に出でられまして彼の鬮を家々の門の口へ差出され、「ソラ〜油断はなるまいぞおツつけ此の如くであらうぞ」と言ひつゝ又大路へ出でましては、「皆々遠からず是れ此の通り御用心〜」と歩き廻りますれば、人々之を見て是れは元日早々忌はしきことであると往來の人の走り逃げ又家々にては門の戸差し込めて居られました、今日に至るまで正月元日門の戸差し込め置きまするは、之れが爲めであるさうでござる、开は儲て置き此日或人一休の今しも鬮を持つて歩き巡るに逢はれて云ふやうは、「是れは〜和尚殿には最と珍らしき御年始にてござる、成程御用心とは御尤のごとでござる、左れど鬮はチト合點參らぬこと下

でござる、好し假令此の鬮はお持ちにならぬとも、人々皆な終に此の如くなることは、今更ら言はずもがな疾に知られて居ること今此の鬮を見たら爲めに新たに知る事にてもござらぬ、左るを人々の祝ふ元日に人情に違ひ習慣に背きて忌々しき鬮を持ち正くとは如何にとも合點行かぬこととでござる』と申せば一休之を聞いて云ふやうは、「否やとよ我れも亦此の元日を祝ふて此の鬮をば持ち來れることである、世に目出度きものが數多くあるとも、此の鬮ほど目出度きものはないことである、實にや昔し天照天神岩戸の開き給ひしより世にも斯程目出度きものはないこととでござる、先づ一首聞き給へ



憎くげなき此觸體穴賢しこ

目出度くかして是れよりはなし

との一首は如何でござる、人々の目出たる穴のみ残りし觸體は是れ豈に目出度きことにてはござらぬか、是れ即ち目が出たるにて目出度きことであると申せば其問ひつる者は勿論の事開が傍へ聴きせし者も皆な之を聞き借ても賢き聖かな活禪師とは此の和尚様のことである、と感じ入つたと申します、又此時の事でありましたが、左にてもあらぬが開は定かなりませぬが、茲に一休和尚の和歌として一首有名なるものがあります序でながら一寸お話し申します其和歌に

門松は冥途の旅の一里塚

目出度くもあり目出度くもなし

と斯くなん詠せられてござる、如何さま深くも悟れる和歌で最とも尊くござります。

一休破戒の頓智

一休和尚は其身僧侶の精淨の體を持ちながら性來蝟が至つて好物でござりましたが、或一日最と徒然の餘り小介に命じて蝟を買ひに遣はされましてるに、折節心ぞす魚屋に蝟がござりませぬゆる、彼の小介此所彼所と尋



ね廻り甚く時が遅れましたる程に一休は最と待ちわびたるまゝ

此たびは急ぐと云ふに長袖の

蝟の入道みちの遅さよ

と斯くなん仕りて今かくと踵を引いて待ち居たる所へ彼の小介蝟四五は  
い買ひもて来られますれば、一休之を見て大いに打ち喜ばれ、直ちに料理  
に着手致さうと思ひましたが、否や待て暫時此の蝟此儘ムザク食んも最  
と無惨の事である、我れは出家の職分イデヤ引導をわたして呉んずと

手観音蝟手多

斬懸ニ袖酢ニ拜ニ如何

州一味天然別

他禁戒任ニ老釋迦

と斯くなん引導が濟みますれば、一休はヤレ引導は濟みたるぞ、イデ此の  
上は火葬にせんか將た土葬にせんか否や、水葬にせよと手取り足取り八  
本の手にくりに沐浴させて袖酢を掛けまして是れは入道坊主の共食ひ近頃  
珍らし甘やとひたものに食されましたが、懸て食ひ終つて口を拭ひ何食は  
ぬ顔して或る旦那方へ参られましたるに酒を薦められ餘り多く飲みました  
ので、處ならぬ小間物見世を明けました明けて悔しき腹の玉手箱より出で  
たるものは、皆な蝟で猶ほ未だ小猪口の附いたる足なりの蝟は消化せず  
ゾロゾロと出で来りましたれば何がさて驚くまいものか愕くまいか旦那  
那を始め家人皆々愕然として大いに打ち驚かれましたが、中にも旦那は一



休に向つて云ふやうは、且是れはく和尙様には日頃佛のやうに思ひまじたるに品もあうに、蝟を食され候と見えてでござる儲てもく人は見掛けに由らぬ腥坊ではござらぬか、イヤハヤ言語同断のことである』と打ち笑ひますれば、家人も共々之を笑ひましたれども、一休毫も騒ぐの氣色なく、従容左りげなく申しまするやうは、二「否や何に我れは蝟を食つた覺えは更らくないことである、今現に斯う出て見れば這も亦詮方ないやうであるが、併し食はぬものは何處までも食はぬことであるとあるに、旦那更らに莞爾として云ふやうは、且否や是れは執拗な御坊である哉今現に面り是れ此の通り吐出したる蝟を食はぬとは儲てく聞えぬ御坊である』と愈

々笑ひますれば一休更らに云ひまするやうは、二「卿等は物の道理を辨へぬものである哉好し假令今口より蝟が出でたりとも決して食はぬと云ふ證據を見せて遣らうと申しながら、人々を引連れて百萬遍の處に行き善導法然の畫像を見せて云ふには、一「アレく見られよ善導敢て阿彌陀を食ひしことはなきことであらうに、口より三尊を吐出されてあるではないか、善導大師でさい食はぬ物の口より出づるを制し難ければ死してや愚僧の如き者食はざる蝟の出づるも亦詮方なきことではないか』と仰せられますれば皆な横手を拍ちて儲ても頓智なる御返答であると、大いに感服せられましたらうでござる。



一休の頓才五百羅漢の名を言當つ

如何なる智者も不圖した所で窮することでありすが、一休の頓才は中々に窮せぬことでござりました、或寺で新たに五百羅漢を作られ堂供養を致されましたるに、貴賤老若男女の見物は八方より群集しまして、其賑ひは中々に大層なことでござりました、斯くて法事も止みて後ち、其寺の僧彼の羅漢の前に香花など取りいけ居りましたるに、此時最とこびたる三人の俗客羅漢を見物して居りましたが、他の見物人は追々と退き歸られました、此の二三人は中々に歸らず、中にも一人は熟々と羅漢を眺め居まし

たが、傍らの僧に向つて問へるやうは ○「卒爾ながら御問ひ参らするが素と五百羅漢には一々名こそござりませうに拙者未だ之を知り申さず、御僧はお職掌から定めて御存のことではなござりませう、チト數多くてお氣の毒には侍りまするが、何うか御示しの程願ひたいことである」と最と懇ろに申しますれば、生憎や此の僧は正面なる三尊の外は一佛をも名を知らぬことでありましたが、僧侶の身として之を知らぬとも言ひ兼ね、這は大變な質問を受けたことである、僧侶の生恥堪らぬことである、と何とも言はず、只だ赤面に堪ぬまゝ方丈の方指してスタコラ逃げ行きました、是れ如何なる僧と雖ども五百羅漢の名を悉く皆な知つて居る者はないことでは



されば、強ち此の僧のみの恥辱にてはないこととてござるが、偕ては僧侶の身として三尊の外は其名を知ぬとも言ひ兼ねて逃げ出したるも、人情左ることとてなござりませう、然るに幸ひなるは折節一休和尚此の寺に居られましたが、今しも一人の僧の慌しく逃來るを見て、「何事にてかある」と問へば彼の僧答へて「實は是れ、斯う只今或る俗の爲めに五百羅漢の名を一々問ひたてられましたに恥かしや愚僧三尊の外は一も之を知り申さず、因つて斯くは逃げ來りしことである」と申すに一休之を聞いて更らに云ふやうは、「入らざる凡俗の咎め立てある哉彌して藝にもならぬ五百羅漢の名誰れか之を覚え居るべきや、左れを望みとあらば言つて聞か

さう」と直ちに羅漢堂へ參られ、彼の嚮きに五百羅漢の名を問ひつる者を捕へて云ふやう、「其方は今五百羅漢の名をもて是れなる僧を苦めたさうにござるが、开は近頃小賢しき質問である、イデ其儀ならば我れ之を言ひ聞かさん程に一々問ふて見給はれよ」とあれば彼の俗、「然らば御問ひ申しませう、先づ其中央なるは誰れにてござるか」「釋迦牟尼」「左傍は何と申さるか」「迦葉」「右は如何なる佛ぞ」「阿難」「偕て其次ぎは如何」「南無さんなど」「然らば其亞ぎは如何」「すきやとや」「其又次ぎは如何」「ならこちた」と恰も立板に水を流すが如く毫も滯なく滔々一瀉千里の勢ひを以て凡よそ百羅漢ほどの名を答ひ言ひましたれば、彼の俗



一休の頓才五百羅漢の名を言當つ

如何なる智者も不圖した所で窮することでありませんが、一休の頓才は中々に窮せぬことでござりました、或寺で新たに五百羅漢を作られ堂供養を致されましたるに、貴賤老若男女の見物は八方より群集しまして、其賑ひは中々に大層なことでござりました、斯くて法事も止みて後ち、其寺の僧彼の羅漢の前に香花など取りいけ居りましたるに、此時最とこびたる二三人の俗客羅漢を見物して居りましたが、他の見物人は追々と退き歸られました、此の二三人は中々に歸らず、中にも一人は熟々と羅漢を眺め居まし

たが、傍らの僧に向つて問へるやうは、「卒爾ながら御問ひ參らするが素と五百羅漢には一々名こそござりませうに拙者未だ之を知り申さず、御僧はお職掌から定めて御存のことではなござりませう、チト數多くてお氣の毒には侍りまするが、何うか御示しの程願ひたいことである」と最と懇ろに申しますれば、生憎や此の僧は正面なる三尊の外は一佛をも名を知らぬことでありましたが、僧侶の身として之を知らぬとも言ひ兼ね、這は大變な質問を受けたことである、僧侶の生恥堪らぬことである、と何とも言はず、只だ赤面に堪ぬまゝ方丈の方指してスタコラ逃げ行きました、是れ如何なる僧と雖ども五百羅漢の名を悉く皆な知つて居る者はないことでは



されば、強ち此の僧のみの恥辱にてはないこととござるが、偕ては僧侶の身として三尊の外は其名を知ぬとも言ひ兼ねて逃げ出したるも、人情左ることとでなござりませう、然るに幸ひなるは折節一休和尚此の寺に居られましたが、今しも一人の僧の慌しく逃來るを見て、「何事にてかある」と問へば彼の僧答へて「實は是れ、斯う只今或る俗の爲めに五百羅漢の名を一々問ひたてられましたに恥かしや愚僧三尊の外は一も之を知り申さず、因つて斯くは逃げ來りしことである」と申すに一休之を聞いて更らに云ふやうは、「入らざる凡俗の咎め立てある哉彌して藝にもならぬ五百羅漢の名誰れか之を覚え居るべきや、左れと望みとあらば言つて聞か

さう」と直ちに羅漢堂へ參られ、彼の嚮きに五百羅漢の名を問ひつる者を捕へて云ふやう、「其方は今五百羅漢の名をもて是れなる僧を苦めたさうにござるが、开は近頃小賢しき質問である、イテ其儀ならば我れ之を言ひ聞かさん程に一々問ふて見給はれよ」とあれば彼の俗、「然らば御問ひ申しませう、先づ其中央なるは誰れにてござるか」「釋迦牟尼」「左傍は何と申さるか」「迦葉」「右は如何なる佛ぞ」「阿難」「偕て其次ぎは如何」「南無さんなど」「然らば其亞ぎは如何」「すきやとや」「其又次ぎは如何」「ならこちた」と恰も立板に水を流すが如く毫も滯滞なく滔々一瀉千里の勢ひを以て凡よそ百羅漢ほどの名を答ひ言ひましたれば、彼の俗



人大いに打ち驚かれました、此の分には五百羅漢は偕て置き千萬の羅漢ありとも必ず答へることであらうと、舌を捲いて閉口され、一休に向つて云ふやうは、「是れはく、和尚殿には御記憶の強きこと閉口の至りでござる、去るにても五百羅漢の御名御知り覺えの段敬服の至りでござりますと大閉口致されましたが何ぞ知らん、一休とても五百羅漢の名一々知りたるにはありませぬが、是れは一休の頓才で蓮華呪の文句をもて一々答へたるものならんとは、左れと彼の俗人素より五百羅漢の名を知りたるにはありませぬゆゑ、這は全く實の名と覺えて敬服したことでござる、左れば此時一休和尚には莞爾として笑はせ給へて申しまするやうは、「我れ幼少の時

より蓮華呪の一卷ばかりは暗誦してあれば、更らに困難とも覺えぬことである、其方復た再び其次ぎを問はんや如何であるか」と云へば彼の俗人始めて氣が着き今更ら我身の不覺を恥入り早々に逃げ去りましてござる、跡にても皆な此事を語り合ひて、偕ても一休禪師には苟めの質問にも窮せず時に取つての頓才敬服のことであると、皆々深く感じたさうでござります

見猿聞猿言猿の二猿奇談

或寺の門の破風に三疋の猿を作り付けてありましたが、一疋の猿は兩手をもて目を塞ぎ居り、又一疋の猿は雙手をもて耳を塞ぎ居りました、偕て又



一疋の猿は両手をもて口を掩ふて居りました、或時の事でござりました、三人連れの男が此の門前に参られました、此の見まい聞くまい語るまいの三猿を見て這は抑も如何なる所以であらうかと兎さま斯さまに考へて居りました、何がさて素となき智囊は如何に絞つても、其智恵の出づべき所以はなきことで、終に何とも合點行かず只だ茫然として佇立して居りますと丁度折りも折りとて一休和尚が通り掛つて同じく立ち寄りて之を見られました、何とも別かず只だ莞爾と笑ひ點頭きて行き過ぎられました、之を見たる三人の中开が一人の申すやうは ○「我等先刻より段々と此の三疋の猿の事を評議して來たが、何とも合點行かず如何にも遺憾に思ふ折節只

今此所に霎時ありて打ち過ぎられた出家の何とも別かず點頭きて行かれたるは、定めて合點したることであらう、イデ是れより追蒐け行き其仔細を尋ね見んことは如何であらう」と云へば、餘の二人 △「其れは至極宜しからん」として三人直に追蒐け行き一休の法衣の袖を控へて云ふやうは ○「若しく御坊よ、聊か物尋ね申さん、开は外にてもござりませぬが、只今彼の門前にある猿を御坊一覽ありて其儘點頭き笑ふて通られたるは、定めて其見猿聞猿言猿の所以御承知のことではござりませう、斯う申す我々は無學文盲にて何の辨へもなき者でござればアハレ願くば其仔細語り聞かされたし」と請ひますれば一休答へて云ふやうは 「左ればである、其猿の



所以は拙僧も能くは知らぬことであるが、左りながら何れも若き男子三人までも打ち揃ふてお尋ねあるを只だ知らぬと云ふも餘り愛想のないこととでござれば、聊か拙僧の存じよりを申さんに先づ一首の和歌を聞き給はれよ斯うでござる

何事も見ざる言はざる聞かざるは

只だ佛にも優るなりけり

と云ふ一首であるが、如何でござると申し捨て立去りますれば、三人の者各々言ひ合へるやうは衆僧てもく御尤なる歌の意かな是れは我々の心得になくて叶はぬことである、左るにても今の御坊は何者にてあるか、

定めて佛神の化現にてもあらう』と皆な一同に感じ入りて歸へられました、開が中に一人の云ふやうは如何に各々方よ、此の歌の意をもて三人共に今日より始め見ざる聞かざる言はざるの願を立てゝは如何でござる、と申せば皆な『是れは一段の思付きである至極賛成である』と直ちに其願の實行に着手致されました、折節遠寺の晩鐘がゴーンと幽かに鳴響きましたるに、彼の聞かざるの願立てたる者之を聞いて思ひ出でられましたか、忽ち一首の古歌を詠まれました

今日の日も命のうちに暮れにけり

明日もや聞かん入相の鐘



と斯くなん口吟まれますれば、傍らに言はざるの願立てたる者の云ひます  
るやうは ○如何に其方よ其方は今聞かざるの願立てたるにあらずや、左  
るに今しも晚鐘が鳴りて晚鐘の古歌を詠むこと、是れ其晚鐘を聞いたるに  
やあらずや、既に之を聞いたるとあらば、其方は直ちに其願を破りたるこ  
とではないか、噫淺ましきことであると、手を拍ちて笑ひますると彼の見  
ざるの願立てたる者熟々と二人の有様を見て云ふやうは扱てく二人は何  
をか聞き何をか言へるのである、其方達はともに聞かざる見ざるの願立て  
たる者にてはなきか、左るを其願立てる舌の根未だ乾かざるに、早くも  
之を破るとは言語同断とや言はん、將た笑止千萬とや云はん、實に愚か極

まつたことである、と言に咎めました何が知らん此の者も亦畢竟前二人  
の有様を見たから之を言ひ咎めたるもので、矢張り同じく其願を破つたこ  
とであります、茲に至りて願みれば彼の見ざる聞かざる言はざるの願を立  
たる三人は皆な忽ちにして之を破つて仕舞つたこと如何にも抱腹絶倒  
の話であります今是れに就いて一條の話がござります、或月の事山王の猿  
共集りて庚申待を致されましたが、時に親猿の云ふやうは 親汝等今夜は  
藝盡をして遊ぶが善いことである、然し何時もの如く猿の木登り軽捷も古  
めかしきことであれば、何がな面白き品を換へたる事をして樂むが善いこ  
とである』と云へば一定の小猿忽ち兩手をもて眼を塞ぎて見猿となります



れば、他の一疋の小猿は又忽ち雙手にて耳を塞ぎて聞猿となられましたるに、其餘の一疋の小猿又々兩手をもて口を掩ひて言猿となられました、親猿之を見て云ふやうは、鬻切て／＼能くも庚申待には出來たることである因つて按ずるに世に云ふ所の庚申は神道にては、猿田彦命を齋き祭るとし又佛法にては青面金剛とすることである、抑も猿田彦と云ふ其名の縁によつて猿を祭らることであるか、开は兎まれ角まれ素と是れ神道のものにも佛法のものにもあらず、即ち道家のものにて其所以は人の身には素と三尸蟲と云ふ虫があつて、此の虫常に人の腹中にあつて能くも其善悪を知り庚申の夜には天帝へ告ぐ、若しも之を告げられては天帝より咎めをも受け畢

竟其人の不爲となることであれば、庚申待をして寝ざれば、此の虫も开を告ぐるに由なく、其儘黙止することであればとて是をもて庚申待をするにとであるが、开は別の事先づ甲兒汝が見猿と爲れるは如何』と問へば見猿が答へて申しまするやうは、見左ればでござります、抑も眼と云ふものは諸々の慾の媒で他の金銀寶財を見ましては、忽ち貪慾の念をも起し又仇女の艶色を見ましては、忽ち淫慾の念をも起し遂には不義不道の穴にも陥ることとでござる、實に眼は身を誤つるの基で常に目に觸るゝもの毎に惡念萌すゆゑ、只だ何事も見ざると爲ることである、左れば老子も五色は人の目を盲すとは申されました、是れ兒が見猿と爲る意でござります』と申せ



ば親猿之を聞き了つて云ふやうは、『偕て次ぎに乙兒汝が聞猿と爲れる意は如何』と問ひますれば聞猿が答へて云ふやうは、『左れば今兒が聞猿と爲る意と云ふは外でもござりませぬ、物の聲耳にすれば、忽ち心に應ずることと我れを褒むる詞を聞いては喜ばしく思ひ、我れを譏る言葉を聞いては心に怒りを生じ、遂に人を恨み、他を咎め一朝の怒毒に由つて身を誤ることである、又他人の好事を聞いては、何となう羨ましくも思ふことと常に無根無形の聲の爲めに惑さるゝことと多きこととであります、其れゆる唯だ何事も聞かざるとなつて、是非善惡の事總て之を耳へ入れざることである、左れば五音は人の耳を襲するとは是れ亦老子の言でござる、今兒が聞

猿となつたるは、全く之れが爲めでござります』と申しました、親猿又之を聞き更らに又云ひまするやうは、『親左らば丙兒汝が言猿と爲れる意は如何』と問ひますれば、言猿が答へて云ふやうは、『左れば口は是れ禍の門で又舌は是れ身を斬るの刀であります、抑も人の是非善惡を批評しよすれば、惡しき者には忌憎まれ、又善言とても其善を盡されば却て人の譏りは得免れぬことで畢竟多言すれば、多敗することである、左れば昔し孔子が金人の背に醜をし給ひし三絨の旨にも言を謹むとことと申しますれば、世上の是非善惡の事に於て唯だ何事も言はざるが善きと思ひ、今兒が此の言猿に爲つたこととでござります』と申せば、親猿一々皆な聞き了つて更ら



に申すやうは、親「今汝等が言ふ所誠」に世に處して人と交はるの要道であるが、然し未だ至極善を盡したものは云はれぬことである、成程一應眼は物を見るが職分、又耳は聲を聞くが職分、又口は物言ふが其職分であるが、然し其實は目にて見るにあらず、又耳にて聞くにあらず、又口にて言ふにあらず、其目耳口はホンノ借物で其本は目口耳にて見るも聞くも又言ふも皆な心である、左るを今汝等は唯だ見る聞く言ふことの三つのもの、みを塞いで却て其見聞言ふ心の大根を塞がざるは、實に内を守る要道に暗きことである、若し能く此の見聞言ふ心の大根だに塞ぎ意馬心猿を守らば好し假令外にあるの目耳口は塞がぬとも所謂視れども見えず聴けども聞え

ぬこととて又決して言ふの憂ひなきことである故に堅く心の身を斷つて其心の見猿聞猿言猿に爲るが肝要のことである、左るを唯だ徒らに其外面にある目耳口のみを塞ぐとも其肝腎要なる心が開放しにては唯だ形ちばかり見猿聞猿言猿の状になつても眞の見ざる聞かざる言はざるには爲られぬこととて、心の大路より見聞言ふ氣は通ふことである、昔し或人平生學文したる書物を庭に積んで、懸て之を焼捨てんとしたるに、偶々一人の禪僧が通りかゝつて云ふやうは、其方は何とて書物を焼捨んとすることであるぞ、と問へば、彼人の答へて、左れば佛書は不淨を拭ふの紙屑で、又儒書は聖人の詞の糟である、我れ今までは徒らに文字の上に於て道を求めたが願みれ



ば、是れ大いなる僻が事、今に於て始めて覺むれば、文字の上、に道なきこと  
 とを自得し、茲に之を焼捨んとする所であると云ふを聞き、禪僧の云ふや  
 うは、之れは亦迂遠のことである、其様の物荒々しく書物を焼捨てぬとも  
 腹中の書物を忘るが善いことである、之れ豈に近道ではないかと申したと  
 か云ふが、此等の意味を深く甘ひ知らば目耳口も敢て塞ぐにしも及ばぬこ  
 とである、何んと兒猿共此の意が合點行かれたか、最とも懇に説き諭され  
 ますれば、三疋の兒猿共言葉均しく云ふやうは、衆然らば親猿殿には何猿  
 に爲られ給ふことでござりますか、親左ればである、我れは何事も不思議  
 猿にならんことである、目は節穴の如く、耳は木耳の如く、口は鰐口の如

く、皆な其功用を失つて始めて世を安穩に渡らるゝことである』と云へば  
 兒猿共皆な感服されたさうでござる、如何さま面白き話で彼の見まい聞く  
 まい語るまいの三猿の意は、一休の歌では猶ほ未だ能くは解らず、今此の一  
 條の話で始めて能く解つたことでござりませう、因つて聊か序での口頭で  
 此の物語を致したことでござります。

金剛の正体一發の放屁の如し

或日或人一休和尚の庵室に尋ね來られてさんとの望を申しますれば一  
 休は之を聞いて云ふやう、「開は最と易きことであるが、其望みとあらば



先づ金剛の正體を案じ出すが肝要なことである』とあるに彼の者の云ふやうは ○『ハ、ア左様でござるか、其金剛の正體ならば敢て案ずるにも及ばぬこととでござる、其金剛の正體とは取りも直さず我等の身體である、何故とならば我等の身體は最と太く逞しく強士であれば是れが即ち金剛の正體ではござらぬか』と出放題にも口から出任せに申しますれば、一休之を聞いて最と可笑しく思召され莞爾として笑れつゝ云ふやうは 『否や、左様のものにてはござらぬ、抑も金剛の正體と申すは音あつて目にも見えず手にも取らず火にも焼けず切つても切れず水にも濡れず又色にも染まず、殆ど何とも別らぬものであるが、偕て然らば全くなきものかと云へば、左

るにてもなく、其時に觸れて亦あるものである、是れを之れ金剛の正體とは云ふことである、合點が參つたか』とあれば、彼の者之を聞いて云ふやうは ○『偕ても六ヶ敷きものであるかな、斯う六ヶ敷くては金剛の正體は中々に我等には案じ出せぬことである』と一休に別れを告げて門を出でられたが、俄かに思付ける面色にてハタと手を拍ち門の邊より取つて歸され一休に向つて云ふやう ○『和尚様よ只今御示されし金剛の正體漸く解りましてござる、門前にて篤と合點して候に其金剛の正體と云ふは外にてもなし、开は尻にてござると考へました、何故と云ふに、尻と云ふものは音はありながらも、目にも見えず手にも取られず火にも焼けず水にも濡れず刀



にも切れず、又色にも染まず如何にとも譯の解らぬものであるが、儲て全くないものであるかと云へば、腹の加減でブー／＼と幾つでもあつて出るものでござる、何んと和尚様之れが金剛の正體ではござりませぬか』と最と自慢顔に申せば一休も最と可笑しく思はれて云ふやうは 『左れば夫れ／＼其れが金剛の正體でさるぞ其金剛の正體忘れまいぞよ』と申して復た大いに笑はれたさうでござる、如何さまにも面白き悟りでござります。

### 堪忍の方法

爰に或る初心の男が有りましたが、屢々一休の草庵に來られ、色々一

休の話を聞いて行かれましたが一休は此の男を見る度毎に 『其方は兎角の短氣ものにて動もすれば間違を仕出し勝ちなれば、随分共に堪忍せられよ』と云に彼の男答へて云ふやうは 『〇之れは／＼和尚様毎々御念の入つたる御諫言骨身に應へて覺えましてござる、然る上は御諫言に従ひ堅く堪忍仕ることとでござる、左れば私無異無事に罷りありまするとき、突然不意に悪漢が來つて我が面に唾吐き掛けまするとも、私は決して怒りませぬ唯だ其儘唾拭ひて堪忍仕ることとでござります、御和尚様御安心下さりませ』と申す一休之を聞いて云ふやうは 『否や其れは悪き堪忍のしやうである、返す／＼も其唾は決して拭ふてはならぬこととであるぞ、其方能く考



へても見られよ、素と人が唾を吐き掛けると云ふは何か怒る所があるからである、左るを之を推拭へば其唾吐き掛けたる者は必ず思ふことである、此奴乃公が吐き掛けた唾を拭ふと云ふことやある、生意氣な奴であると、又更らに怒つて再び唾吐き掛けることである、故に其唾は決して之を拭ふことなく、唯だ自然のまゝに之を乾しつけ置き莞爾として笑み甘んじて之を受くるが宜しい、左すれば彼の惡漢も張合抜けがして、遂には何となく立去る物である、之を譬へて申さば人の譏を聞いても怒らず唾など吐き掛ければ、其儘拭はずに自然に乾し付けて置くのは、丁度野原で火を燃すやうなもので、好し假令一時は天を焦すの勢ひがあつても、何も夫れか

ら夫れと云ふ關係の物がなく、火炎は自然立消えになつて仕舞ふことである、左るを人の謗を聞いて怒り、又は人の吐き掛けし唾を拭ひなとするは、丁度彼の春の蠶が繭を作るやうなもので、自ら其糸にからまれて开を避けんとすれば、愈々益々身に纏綿りて終には其絲の爲めに身も害さるゝやうなものでござる、茲の道理が解らば、人の吐き掛けた唾は先づくもて拭はぬが宜しいことである、且つや我れ何もせぬのに突然不意に來つて唾など吐き掛くる者は、之れ決して尋常の者にてはない、痴愚か狂人の寧ろ蠅虫も同様な奴である、彼の蠅と云ふ虫は如何なる高位貴人の頭へも留りて糞などをひり掛くること、實に言語同斷の虫であるが、之れが